
魔術師戦争

悪天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師戦争

【Nコード】

N2504H

【作者名】

悪天

【あらすじ】

平凡で、毎日変わらない生活。私は高校2年生、なまきなだみさと 凧灘美里ある日転入してきた男の子。その子は、私を引き連れ屋上へ。…そこで、自分は魔術師だと言った。何やら、魔術師が危険と見なした者達“オルフェルト”を封印すべく、戦っているのだとか。今、魔術師戦争巻き起こる

第1話「魔術師？現れた転入生」

人は誰しもが欲を持ち、望みを叶えたいと願う物。

それを叶える存在オルフェリト。それは、魔術師の中でも危険と判断される者達。

オルフェリトは全部で8つ、存在する

崩壊・魅了・蘇生・石化・殺傷・増減・霊魂

そして残りの一つ、それは

“封印”

オルフェリトを封印出来るフェルオリト。
オルフェリトの中で一番標的となりし者

美里っつ！美里ちゃん、ご飯よっ！

「っっっんっ」

「早くしないと、遅刻しちゃうわよー！」

「もう少し、もう少しだけ…」

「もう7時50分よ!」

「…うっ、ねむっ」

ふと私が時計を見る。

「…、あああっ!もうこんな時間、何でお母さん起こしてくれないのよ〜!」

「何度も起こしました。第一ね、高2なんだからそろそろ一人で起きられるように…」

「行ってきます!」

「あっ、美里!ご飯は!」

「いない!」

こうして慌しく家を飛び出した。

私はいつもこんな生活を繰り返している

朝にはどうしても弱いわ…ふあっあ…ねむっ…

あくびをしながら学校へ走りこむ私。

教室のドアを開けたと同時に

キーンコーンカーンコーンッ

よっしゃ、ギリギリセーフ！

先生もまだ来てないし、ラッキー！

「ごほん。凧灘さん」

「ひゃあっ！せ、先生…いたの？」

後ろに先生が立ってるじゃん！

「…凧灘さん、遅刻…と」

「あ、ダメ！先生に見逃してくださいよ、優しい先生！お願い！」

「…とりあえず席につきなさい。皆さん、転入生を紹介します」

「転入生…？」

私が席に付く。私は一番後ろの席で、窓側なんだ
当然お昼ねして、それに気付く先生は少ない

と、思っていると隣の友達、雪が話を掛けてきた

「ねえ、美里。転入生って男の子かな、女の子かな！」

「どつだろっね〜」

とりあえず興味ないからテキストに返事をする

「男の子だったら、かつこいい人がいいな！女の子だったら、お友達になりたい！」

「はは、雪は相変わらずだなあ」

そして先生は転入生に声を掛けた

「入ってきなさい」

ガララツと教室のドアが開き、転入生が入る。
どうやら男の子らしい

む、意外にイケメン？

紺色のハンチングをかぶって、うちの制服を着ている
背は…160くらいだろうか？多分

「えー、彼が転入生の春伊寮君だ」

「春伊寮です。皆さん、よろしくお願いします」

すると雪。舞い上がってます

「きゃあ！イケメンじゃん〜！」

雪だけじゃない。周りの女の子はもうメロメロ

「春伊君の席は…そうだ、凧灘さんの前が開いてるね」

そう言うと、寮君は私の前に座って一言

「よろしく」

「え、あ…よろしく」

口数少ない気がするのには気のせい？もう少し感情こめて挨拶してほしいわ

感情こめない人って、何か付き合いづらいというか…なんというか

「もう、美里ったら！ね、ねえ寮君！私、福原 雪！よろしくねー、彼女とは友達なの！」

「よろしく」

うっわ、マジ付き合いにくい

周りの女の子はズ〜っと寮君に夢中みたい。
そこで先生が

「はいはい、皆さん。春伊君への質問は休憩時間にして、授業始めますよ」

そんなわけで。授業が終わって休憩になりました！

周りの女の子はよってたかって寮君の所へ。

周りの男の子は嫉妬ぎみ

私はいつものように机へ伏せて、寝ていた

「ねえ、寮君って好きな女性のタイプとかは？」

「ん、どうかな。よくわからないです」

「じゃあ、じゃあ！好きな物とか…、ほら、プレゼント的な」

「好きな物…ですか、そうですね…プレゼントでもらうとしたら…」

ん？それは少し私も興味あるかも

「ダイヤモンドとか、宝石類が大好きです。後は高価な時計やアクセサリー」

うわ、なんかサラッと酷い事言ってますよ

「きゃあ、そんな寮君もすてき！食べ物は何が好きなの？」

「ん…」

む、これも気になるかも！

「卵かけご飯、ねこまんま」

うわ、すごい庶民的…

「そうなんだあ！」

いやいやいや、あなた達引こつよ、おかしいってこの人！

「あれ以上に美味しい物はないよね。脂っこい天ぷらやステーキは

苦手」

「そうよね、そうよね、わかるわー!」

嘘つけ。君達お肉大好きだろう…脂物大好きだろう…

「じゃあ、じゃあ!寮君の…」

「あ、ごめん、少し用事あるんだ」

「え、うん。それじゃあまた後でね」

すると寮

「…えーと、君、君」

「?、私?」

「そうだよ」

「私は風灘美里!」

「じゃあ美里」

「あんたねえ、馴れ馴れしい!」

「こっちこっち」

「え、ちょっと!引つ張らないでよね、第一どこへ!」

「人気の無い屋上」

「ちょっとやめてってば〜！」

「美里、がんばってねー」

何を！つか雪、友達でしょ！応援するだけ！？

そんな事、思いつつ屋上へ拉致された

「もう、なんたって屋上へ…。ねむっ」

「美里。よく聞いてくれ」

「？、何よ」

「…俺は普通の人間じゃない」

「うん、それはわかってるわ。高価な物が好きで庶民的なご飯が好きで。ふふ、変な奴」

「そっそっという意味じゃない！」

「じゃああなたって…」

私が寮に振り向いた瞬間。

「きゃっ！」

地面から炎の柱が突き出て、メラメラと燃えている

「な、何、どうなってんの！いや、学校火事に…！」

「これでわかった？俺は魔術師。魔力を持つ人間」

そう言うと、水が噴射され火が消えた

「うう、ま、魔術師？きつと手品か何か…」

「美里。君を勝手ながら仲間にする。強制だ、拒否権はない」

「はっはあ？でも私魔力なんか…」

「…大丈夫。君は俺が守る」

「え、そっ、そう言って私を…」

「…じゃ、そう言う事で」

「ちよつとお、待ちなさいよ！」

そして寮は屋上の階段を下りた

「あ、早くしないと授業遅れるよー！」

キンコーンカーンコーン

「！、チャイムが鳴ったああ！寮、待ちなさい！こらあああ！」

こうして、自分が魔術師と名乗る寮と出会った

私は彼に振り回される運命なのかな

ってか、私あいつに口説かれたわけ？そうよね？

そう受け止めていいのよね？！？寮？！？

続く

第1話「魔術師？現れた転入生」（後書き）

まあこんな具合で始まった小説なのですが…
初心者ですみません。

次回もこんなテンポ？でやっていくつもりなので！
よろしく願います！

第2話「魔術師戦争!？」

「それでは、解散」

… やつと学校終わったああ! さ、かえろ

「ねえ、寮君。今日一緒に帰らない？」

「え、いいけど？」

「じゃ、決まりね!」

… 他の女の子は積極的だな…

つか、寮モテモテ!

他の男の子は何気に寮を睨み、教室から出て行く様子
すると雪

「ねえ、美里! 寮君人気ね」

「そうだね…」

「そういえば。屋上で何話してたの？」

「へ? え、え」とね…」

「何か変な事とか!」

「ちよつ、変な事言うなばかあ！」

「嘘、嘘だつて！」

「あいつ、気に食わないわ」

「何で？」

「いきなり……」

「あゝあゝ、それ以上言わなくてもいいわよ！ふふ、わかるわかる、相手は男の子だもん、そういう事一つや二つ……」

「もう、雪！」

「冗談、冗談……」

「冗談でも言っていていい事と悪い事が……。いきなり変な事言い出すのよ？魔術……」

「……？美里？」

嘘、な……何で？声が出ない！

「おい、美里」

急に寮が話をかけてきた

「一緒に帰らないか？別の奴も一緒だが」

「なつな、何言ってるのよ！雪、行くわよ」

「え？あ、美里っ！じゃ、寮君また明日ね〜！」

「また明日」

…急に出なくなった。声が…

しかも寮と話す時は声が出た

…これは…、まさか本当に？

寮って魔術師！？

家

やっと落ち着ける場所に帰ってきた

ここがやっぱり一番落ち着くわ、我が家一番！

そして家のドアを開けると

「美里ちゃん、お友達が来てるわよ」

「え？雪…じゃないよね」

「雪ちゃんじゃないわ。男の子だったかしら、しかもかっこいい！お母さん惚れちゃいそうよ〜」

「…え？」

「ふふ、冗談よ！美里ちゃんにもあんな彼氏が」

「ごめん母さん！また後で聞くわ！」

「あ、美里！もう…」

私は一気に階段を登り、自分の部屋へ急いだ

「…寮！」

「…よっ」

「…「よっ」「じゃないわよ！人の家で何してんの！しかも、何で私の家わかったわけ！？他の女の子と帰ったんじゃないあ…」」

「んー、美里の部屋ってラブリーだな。かわいい」

「うっ五月蠅い！」

「…美里は俺が守るって決めたんだよ」

「出て行けーっ！」

「母君だって、賛成してくれたんだぞ？」

「はっ母君って言わないでよ。普通に」「おばちゃん」「とか」「母さん」
「って」

「とにかくだ。お前、勝手な行動してると死ぬぞ」

「何だよ」

「…」

急に黙る寮。私は酷く睨みつける

少しの間を置いて、寮が喋り始めた

「美里。魔術師の存在を通常の人間にばらすな」

「…あっ」

そういえば私…

『いきなり変な事言い出すのよ？魔術…』

それから声がなくなったんだっけ

「ご、ごめんね。私…」

「…ま、気をつけてくれればいい話だ。美里、落ち着いて聞けよ」

「？」

「お前はオルフェルト。封印のオルフェルト」

「…」

「だから、命が…」

「なあに、それ？オリハルコン？」

「ちつ違つ！…一から説明が必要か」

「うん！」

「…返事がよろしい。はあ」

そう言うと、深呼吸を一回して話し出す

「オルフェリト。それは魔術師の中でも危険と判断される者達」

「ほ〜」

「その種類は8つだ」

「8個…、じゃあ寮もそのオルフェリト？」

「あんな奴等と一緒にしないでくれ。俺はちゃんとした魔術師。
…
奴等は生まれ付、その能力を持つ」

「ほうほう」

「まず、崩壊のオルフェリト。こいつは世界を滅ぼす力がある」

「ええええ！」

「が、代価として技を使えば使うほど命が減る。つまり世界を消せば自分も命ないな」

「ふうん…それってある意味やばいじゃん…」

「次は魅了のオルフェイト。こいつは男達を術で魅了し、操る」

「女は？」

「女も魅了する事は可能だが、大きな魔力が必要だ。代価として、一回術をかけると一日分歳を取る」

「それって、世界の男達を虜にだって可能じゃない？」

「そんな事してたら死ぬって」

「…そっか。次は？」

「蘇生のオルフェイト。死者を蘇らせる、現実を覆すような奴だ」

「…、それって」

「彼女が事故死しても蘇生出来る、“失う”という怖さを知らない奴さ。代価として自分の体はどんどん弱りは果てるけどな」

「…蘇生、か」

「石化のオルフェイト。これは触れる物を石に出来る。石化した奴をぶっ壊せば、殺す事だって出来る」

「…それは怖いかも」

「代価として、徐々に体が重くなってしまつという」

「それ、重くなつたらどうなるの？」

「最後には自分が動かなくなるだろうな。次は殺傷のオルフェリト」

「ほう…」

「奴の技に、ほんのわずか、一mでも触れるとその相手は死ぬ」

「…それって一撃KO!？」

「代価として奴に少しでも攻撃を与えれば奴が死ぬ」

「…まさに一瞬の勝負…」

「次は増減」

「ぞ、増減？」

「物を増やしたり、歳を増やしたり。減らしたりだ」

「…歳、増やして殺す事が出来るのね」

「そう言う事。代価としてそいつは徐々に化け物化していく。手足増えてな」

「きもっ!」

「ある意味一番嫌なオルフェリトだよ。次は靈魂」

「魂を吸うの？」

「そうだ。吸魂と言った方がいいか…亡霊をも扱っている」

「ひえ〜」

「代価として、自分の魂が日に日に吸われ続けていく。相手の魂を吸えば回復出来るんだ。つまり死なずにすむ」

「…人を犠牲に自分が生き残るオルフェリトかあ」

「最後、封印」

「封印？」

「オルフェリトを封印するオルフェリト。一番標的となるオルフェリト」

「ふうん。世界の救世主的な？」

「そうだ。…その封印は、オルフェリトの中で唯一代価が無い」

「へえ」

「ただし、全部のオルフェリトを封印した時…封印も消滅する。全てを封印したら、神に君臨出来ると言われている」

「ほうほう…ありがと、ためになったわ。じゃ〜もう6時だし、バイバイ」

「…封印のオルフェリト。貴殿を誰にも殺させたりはさせない」

「…？ちよつと、寮。何言つて…」

「美里が封印のオルフェリト。…7つのオルフェリトから狙われ続けるであろう封印のオルフェリト。そして世界の救世主」

「…え？そんなつ、事急に…」

「美里は、魔術師戦争に強制参加だ」

「えええ…」

よく出来ました

「!?!」

「この…声」

「封印のオルフェリト。貴様を排除する」

「だっ、誰なの？誰なのよ、寮！」

黙りこくる寮に私は必死となって声をかけた
そして、一言

「崩壊のオルフェリト」

「え？こいつが…！」

黒いジャケットに白いTシャツ、青いジーンズを着こなした男が現れた。…窓から

「そつだよ、その魔術師君。…崩壊のオルフェイト、ルイン。封印のオルフェイトを排除しに来た」

ルインとなる男は、私の部屋に侵入し…

「死ね、封印！」

「…！」

「美里っ！」

間一髪

寮が魔法を唱え、私を助けた

「ちっ、岩の壁」

「普通の魔法で挑むとは、ずいぶん余裕だなあ。崩壊さんよ。もとい、ルイン」

「…戦う時は相手の名前を教えなくちゃあな？無礼だぜ」

「…春伊寮。こいつぁ、封印の凧灘美里」

「ふうん。…封印を消し、俺等は自由となる」

「あらあら、それはそれは。…自由に暴れまわって、困ります事」

「てめえ、バカにしてんのか」

「さあな。…美里、逃げる」

「で、でも…」

「お前に死なれちゃ困るんでな。俺が蘇生に頭を下げると？オルフ
エリトなんかは頭下げねえぜ俺は」

「…」

私はただ見守る事しか出来ない。

何かしたい。…封印の術って、どう使うの？

わからない、何もかもわからないよ

私はどうすればいいの？

続
く

第3話「崩壊のオルフェリト」

「…崩壊のオルフェリト、ルイン。封印のオルフェリトを排除しに来た」

「崩壊の、オルフェリト…こいつがっ」

戸惑う私は一歩一歩後ずさりする

だが、相手も当然見逃してはくれない

「封印のオルフェリト、この場から逃げようなんてとんだ腰抜けだ」

ルインと名乗る男は、挑発をしてきた。

そして私はその場に座り込み、ただ二人を見ているだけだった

「美里！奴の事を聞くな！今は命優先…」

「余所見厳禁」

「…！」

「寮…！」

寮はルインに突き飛ばされ、壁に強く叩き付けられた

しかも、その壁は今にも別の部屋へ突き抜けそう。凄くへこんでいた

「へへ。そこらの魔術師も大した事ねえな」

「…っ、くっ…」

「寮、寮っ！わっ、私…ごめん、私のせいで」

「…お前を守るのが俺の…。…だから何も気にする事はない」

「そんな事！…何で、何で私のせいで寮が死ななきゃならないのよ！自分の命くらい大事に…」

…待つてくれない。敵は

「もう、お別れは済んだ？」

いつのまに私の後ろへ立っていた

そして私の肩を掴む

「…ルイン君、だっけ。…寮をこれ以上」

「うん、だから死ね。封印」

ミシミシッと床が割れそうなくらい、力が入っている。

私はただ、苦しみながら声あげる事なくその痛みを受け入れようとした
だけだ

「っ、あっっ！」

急に手を離すルイン

「ちっ、まだ動けたか貴様！」

「…お前なんかに、美里はもったいなすぎる。…へへっ」

袖で血を拭いながら苦し紛れに言う寮。

この一言に奴もとうとう本気を見せた

「…どこまで侮辱すれば気が済むんだよ！」

「おうおう、ガキだな。お前はその程度も我慢出来ないオコチャマですか」

「五月蠅い、五月蠅い五月蠅い！」

「いいご身分様で。オルフェリトの存在、俺は大ッ嫌いなんだよ」

「バカに…するの、いい加減にしろ。一瞬で蹴りつけてやる！」

「…技解放すれば…お前の命は」

「封印が消せればそれでいいさ」

そう言うと、心臓辺りに手をやった

「…解放」

その言葉と同時に、物凄い殺気が広がった
私にも、すぐにわかった

「美里、逃げるぞ」

「…」

「突っ立つな。こんな解放した相手、勝てん。この家には悪いが諸共崩れ去って…」

「そんな事出来ないよ。お母さんがまだ、この家に」

「…だよな。…あいつをどうにかして外へ…」

「死ね、封印…今度こそ貴様を」

床が破壊した。

そして床の破片は私の服に刺さり、壁際へ押さえつけられる。
一歩も動けなくなった

「…これで、終わりだ封印！」

家の天井が落ちてくる！？

これが、崩壊の力？

ううん、これ以上に凄い事が出来るんだ。…世界を滅ぼせる力…

「美里っ！…どうにかして…」

「きゃああああっ！」

もうだめ、そう思った瞬間

…何も落ちてこない
ふと上を見ると、茶色い岩が天井となり支えていた

「寮、テメー。どこまで封印を庇う気だ。このままだと何れペシヤンコだぞ」

「…っ、俺の魔力が尽きようと、命が尽きようと。彼女は最後まで守って、みせ…るっ」

「…オルフェリトが嫌いなんだろう？じゃあさっさと殺させるよ」

「…封印、以外はな。…封印は神になる。…お前等の運命を変え…、
てくれる」

「あまいな。自分の愚かさを知れ！」

床が変形し、棘のような形になった。
その棘は岩の壁を突き破る

「っ、しまっ…」

だが、相変わらず天井は下りて来ない

見ると、奴は伏せている

「…ルイン。俺等を殺すんじゃないのか？」

「…うる、せえ。…殺そうと思えばいつでも、いつ…でも」

「少し俺等如き相手に、力使いすぎたな。今度はお前が逝く番だぞ」

「…嫌だ…俺は、俺はまだ死にたくない…嫌、嫌だっ！」

「散々俺等を殺そうとしといて、何だ今更」

「来るな、来ないでくれっ！うっ、あっ」

涙ぐみながら、後ろへ後ずさりするルイン。

形勢逆転…これであの子も、私がどれだけ怖かったかわかってくれるといいんだけど

「ルイン。あの世で後悔するんだな」

「…、嫌…、ゲホツ…つく…」

吐血をしながら訴えるルイン。その姿は…こう言つとあれなんだけども

…無様で、可哀想だった

「寮、やめてあげて」

「美里…？」

「ルイン、あなたは私を殺そうとしたのよね。でも私はまだ死にたくないの。…それは、今のあなたと気持ちが同じよ」

「…、封印の言つ事なんかっ」

「殺されそうになった時、怖かったの。凄く。…それもあなたと同じ」

「…」

「命を張ってまで、そんな技を解放しちゃダメだよ。…自分の命は大切にしなきゃ、ね？」

優しく肩を叩く私。…その時、白い光が噴射された

「…!?!」

「美里、これは一体!」

「私にもわからない!」

「…、封印の効果発動」

ルインがボソツと呟く

「…美里、寮」

「なんだよ?」

「ん、どうしたの?」

「俺の術が封印されたからには、普通の魔術師として生きていくしかない。…その、あの」

顔を赤らめながら言う

「俺、ずっと一人だった。…だから…その」

「うん、いいよ」

「…？え…」

「言いたい事は大体わかるから。これからもずっと友達！」

「…ありがとう」

「美里が言っなら…ま、いいか」

こうして崩壊の術を封印。

今は、崩壊のオルフェリト・ルインではなく、一人の人として生まれ変わった。

食卓

「何で寮とルインがいるのよーっ！もう10時、帰りなさいよー！」

「いやあ、お世話になりますね母君。これからもよろしくお願いします！いやあ、母君料理お上手ですねー」

「お母様、これとてもおいしいです！こんな美味しい物初めて！」

「やだわあ、お二人ともお世辞うまいわねえ！」

「母さんも何で否定しないの!? 一人を留めるとか…ただの居候じやん!」

「やあね、美里ちゃん。こんなイケメンが困ってるのよ? 放る方が無礼!」

「はあ〜!?!?」

「お母様、おかわり!」

「母君、おかわりください!」

「はいはい、今持ってきますね」

「二人も、母君とかお母様とかやめてよ!」

「こうしてうちの食卓もにぎやかになったとね…」

なんか嫌だ

続く

第4話「転入！？ルイン、改め伊雅健太」

ルインと寮は和室を借りて寝ている。

私はぐっすり、ベッドの上で寝るのだ

「おーい、美里」

声が聞こえる。むう、もう少し、もう少しだけだから…

「…遅れるぞ?」

「ほええ、寮…?むにゃむにゃ」

「寝ぼけるなよ。じゃ、先行くわ」

「んー…今何…」

AM 8:00

「きゃあああっ！寮のバカ、早めに起こしてよお!」

そして母さん。ルインとゆっくりご飯を食べながら

「行ってらっしゃい、美里。寮君って早起きなだね」

「がんばってこいよー、今日も一日！ふああ、もう一眠りしようかな」

「ルインは気楽でいいよねっ！まったく、行ってきます!」

「あ、美里ちゃん！ご飯は？」

「いらないつ！」

こうしていつものように慌しく飛び出した。

今日も、やっぱりギリギリセーフ！

息を切らせながら席に着くと、雪

「美里、いつも遅刻寸前じゃん！」

「だってえ、朝に弱いんだもん」

「居眠りが得意だからな」

「もう、寮！？」

「ねえねえ美里！寮君って、転入当時素っ気無い雰囲気だったけど、どうやってあそこまで？」

「…いろいろあったの。いろいろ」

そんな話をしていると、先生。

「今日も転入生を紹介するぞ。どうぞ」

そして転入生が入ってきた…

つて、え？

「転入生の、伊雅健太君だ」

「どもーっ、伊雅健太です！よろしくっ！」

周りの女の子は非常に喜んでいいる。
寮に続き、彼まで入ったのだから。
でも、何で！？

え、ええ！？と思い
つい口が滑って声に出してしまった

「る、る…ルイ…」

その瞬間、誰かに足を踏まれた

「いついたあああっ！いたあああ！」

「あ、すまん、足が滑った」

「ちょっと、寮！？」

「伊雅君。皆に一言言いたい事あるかな？」

「俺、尻灘さんの彼女ってとこかな。寮とは宿敵でっすっ！」

はあ、何言ってるのよ！？

周りがザワつき始めた…

どうしてくれんのよー！

そんな事を思ってると寮。急に立ち上がり

「先生！俺トイレ行っていいっすか！」

「早く帰って来るんだぞ」

「凧灘。ちょっとついてこい。そこ、転入生も！」

あれ、普通に苗字で呼んだ？…そっか、学校だもんね

「って、何で私まで！」

「あはは、皆さんちゃおちゃおっ！」

お気楽者のルイン。こりゃ人気者になれるかもね…

教室のドアを出て、本当にトイレの方向へ行きだした寮。

そしてトイレ前に来ると、ルインを拳骨で殴った

「いったい！…うう…」

「何でお前がここに！まだ14歳だろ！？大人しく中学校へでも…」

「えー、だって俺…」

するとルイン。私の方をチラ見。

「美里と居たいから」

「へ？あ、あのね、ルイン」

「まったく。これでもし、お前が崩壊のルインとして生き続けていたら俺はお前を殺す所だぞ」

「だって、美里のあの時の言葉」

『命を張つてまで、そんな技を解放しちゃダメだよ。：自分の命は大切にしなきゃ、ね？』

「…あの時。：俺の気持ちを分かってくれるのは美里しかいないって思った。孤独感が和らいだ気持ちだった」

「…それでこれですか」

後ろに組むルインの手を握り締める。

すると、ナイフがボトボトと落ち始めた
さすがに私もびっくり…

「あ、ばれてた？これで寮を刺し殺せるかなって」

「人に当たつたらどうすんだ！」

「大丈夫だよ、俺プロだし」

「…」

「え、あの…二人とも」

「それと、美里」

寮が私を呼ぶ。私は何か言われると思い、目を閉じた

「…ルインがせっかく、伊雅？健太として現れたんだ。ルインとか言う、日本人がどこに居る」

「た、確かにだよ。反省してます、はい」

「まー、いいんじゃない？俺は気にしてねーよ」

「お前が気にしてなくとも…」

「…ねえ、寮？寮にもやっぱ、ルインみたいな名前あるの？春伊寮ってのは偽名なの？」

「…ああ」

「そうなんだ。…教えてくれないかな、本当の名前」

「すまんが、それは出来ない」

「何で？」

「…美里！」

「なっ何よ！いきなり大きい声…」

「俺はいつでも春伊寮だ。それ以外の何者でもねえぜ！トイレにしては長引きすぎたな。先生に怒られる！」

「あ、待ちなさい、寮〜！」

「寮の本当の名、知りたい？美里」

「ルイン…しってるの？」

「うん、でも聞いたら…美里、寮の事嫌いになっちゃうかもよ」

「え？どういっ…」

「ふふ、あまり人が知られたくない事を知ろうとするのはよくないよ」

「…それは、わかってる…。…寮が嫌なら仕方ない…よね」

「ほら、美里は元気が一番だよ！俺に微笑んでくれたみたいに、笑って笑って！」

「ルイン…じゃなくて。ここでは健太か。授業に戻ろう、伊雅君！」

「それでよし！学校での俺は、伊雅健太！それ以外の何者でもない！なんてな。ハハハッ」

「ばかやっていると遅れるよ〜！」

「あ、待って〜！」

こうしてルイン…もとい、伊雅健太が転入してきた

…その一方、影では

私を狙うもう一人のオルフェリトが忍び寄っていた…

続く

第5話「男子虜！魅了のオルフェルト」（前書き）

恋愛要素？や、キスシーンがあります。

苦手な方はごめんなさい。

ま、キスシーンと言っても省略してるから、苦手な方でも読めるはず…。あまり詳しく書いてないし

第5話「男子虜！魅了のオルフェルト」

そんなわけで、お昼ごはんの時間になりましたー！

ま、弁当じゃなくてほぼ毎日、売店なんだけどね

すると雪。どこから情報を入手したらしく

「ねえ、美里知ってた？」

「ん？」

「最近、男子達がうっとり…というかなんというか、し始めたんだって」

「ああ、いつもの事でしょ？あの先生、すっごい美人だもんな」

「そっだよね、憧れちゃうよー！」

「おっ、噂をすれば！」

そっ、すっごく美人なの…

羽倉美千子先生！
はねくみちこ

見てるこっちも、うっとりさせられるほど魅力ある人なんだ

すると雪は言っ

「美里、ほらみて？いつもの男子と違うでしょ！あそこ！」

「…確かに…」

すると羽倉先生。私達を見て軽くお辞儀
私達も慌てて軽くお辞儀をした

「んー、どうしちゃったんだろうね？まさか、本気で惚れたのかな」

「そうかもしれないね。寮達がトイレから戻ったら、先生紹介しなくちゃ！」

「ふふ、さすが美里！」

「そ、そんな変な意味じゃないんだから」

「はいはいっ」

そんな話をしていると、寮達が帰ってきた

「あ、寮〜、健太〜」

なんか、ルインを呼ぶ時の「健太」って奴に違和感あるけど…
仕方ない事なんだよねえ

「なあ、美里」

「ん、寮どした？」

「あの先生ってさ、あんな香水ぶんぶんさせてよく歩けるよな」

「ああ、でも皆先生の虜だよ？」

「ふうん」

そして雪は、席から立ち上がる

「美里、邪魔しちゃ悪いね。じゃあね〜」

「あ、こら雪！別にそんな事っ！」

「ねえねえ、凧灘さんっ！」

「けっ、健太！苗字で呼ぶのやめて」

「えー。じゃあ、美里〜。屋上行こうよ」

「え、うん。でもなんで？また大事な話？」

寮は、耳元で囁く

「…あの先生の事で」

「あら、君達が新しく転入してきたって言うっ！」

なっなんとタイミングがいい！

結局何が言いたかったのかわからなかった

「そつですか？」

「俺等に何か用〜？先生〜」

「お名前、教えてくれるかしら？覚えなきゃいけないからね」

「…春伊寮」

「俺は〜、伊雅健太〜」

「まあ、春伊君と伊雅君ね、覚えておくわ!」

「先生、どうしたんですか？」

純粹に私が質問すると、先生

「ふふ、少しお話があつて来たのよ〜」

「そうなんですか〜」

だが、寮はその先生を警戒し続ける。

一方ルインは警戒してるようでしてない…ああ、彼の感情が読めないわ!

そして寮は先生に

「…屋上、行きましようか。ここじゃ目立ちます」

「そうね、私もちよつどあなた達とゆっくりお話がしたかったの」

「美里、お前はここにいてくれ」

「え？何で？いつもなら…」

いつもなら、連れて行ってくれるのに…

するとルイン…もとい健太

「寮、いいじゃん！美里を連れて行ったほうが何かといいかもよ？」

「そうねえ、私もその子とお話したいのよ」

そして、屋上へ登る私達

屋上へ登りきって、寮の一言

「魅了のオルフェリト…まさかそれが教師とは」

「あら、春伊君、鋭いわねえ。封印ちゃんを大人しく渡してくれる？」

「あはは、魅了が教師！あんま似合わねえーっ！」

「お黙りなさい、崩壊！貴方にはこの魅力がわからないのよ」

盛り上がってる？ような雰囲気の中

私は一人、それを眺める

つて、ええええ！？

羽倉先生が魅了のオルフェリト！？

すると羽倉先生。本気になる

「…あなた達、何故私の虜とならないの？まさか、解放しないといけないわけ？」

「俺、女性とかに興味ないから」

「俺、恋愛とかよくわかんないし、好きって感情すらわかんないからごめんねえ」

こらこら君達、少しは興味持てよ
というかルイン。それは恋愛に対して鈍感という奴では？

「ふふ、いいわ。いいわよ…私の虜にさせてあげる。強制的にねえ！解放！」

「美里、逃げる！」

力強い寮の声に、私は頷き逃げる
…だが

「逃がさないわよっ！」

「きゃっ！」

なんだかよくわからないが、トラップが仕掛けられてあつた鉄の檻に捕まった私を見て、先生

「あはは、魔術師と崩壊が私の前に跪く姿を眺めてなさい！」

「うっ、寮ー。俺なんか腹痛いー…頭の中が掻き回されるようにぐるぐるするー」

これはピンチという奴なのか？
ルインに変化が起き始めていた

「魅了、お前は…」

「あら、春伊君？貴方の言う事なら聞かないわよ。ほら、私の眼を見なさい」

必死に、目を瞑り相手の顔を見ないようにする寮…
しかし、相手の方が積極的で、一枚上手だった

「ほら、こつちを見なさい。全ての男は私の虜となるのよ」

まさに至近距離

寮の顎を軽く持ち、先生は見つめ続ける

いや、嫉妬じゃないよ！？嫉妬じゃないんだから！

するとルイン…最後の力を振り絞って

「寮…っ、今助ける！」

先生と寮の間に、炎の壁が突き出した
これには先生もビックリ

「魔術を使うなんて…憎たらしい子。もう少しで先生の物だったのに」

「寮…、大丈夫か！」

「無駄です。彼は私の術によって、眠りに落ちた」

「…そっか、魅了の力は魅了させる事だけじゃない…魅了し損ねた相手を眠らせ続けるという」

「大人しくしていればよかったもの！崩壊のオルフェリトは邪魔する事が好きなのね！」

「そんな事、魅了に言われたく…！」

先生の方をルインは振り向く。
すると

「あ、うう…腹痛が。意識が遠退いていく…」

「もうこの際…あなただけでもいいわ。私の魅力に魅かれなさい」

「美里、魅了されない方法、それは奴の目を見ない事。奴とのキスを避ける事だよっ、後は自分でなんとか封印…」

「そう、目を見たら最後…体が麻痺したように動かなくなるの。…
そしてこういう風に」

私は檻に居るのでそれを眺める事しか出来なかった…
ルインの顎を軽く持った後、な、な、なんとっ！

…キスしたの

嫉妬じゃない、嫉妬じゃないけど…

「ふふ、ご馳走様。さっそくだけど、その封印を殺しなさい！」

え、え？

そんな、何言ってるの…？

ルインが私を…

その瞬間、炎の魔法が飛んできた

衝撃により、檻はなんとか破壊された

これが、魅了の力…

魅了の…

「ふふふ、あはははは！気味がいいわ！」

「…っ、先生…いえ、魅了のオルフェルト」

「あら、命乞い？」

私は勇気を出して、先生の胸倉を掴む

「貴方は私を殺しに来たんでしょ！？彼等は関係ないでしょ！」

「邪魔者は全て消す。…それに、彼達が貴方を攻撃して殺す方が、楽しいもの」

「五月蠅い、五月蠅いつ！」

「あらあら、可愛いのね、凧灘さん。伊雅君にキスした嫉妬〜？」

「ちっ、違うわよバカ！返して、寮と健太を…」

「あら、それはごめんだわね。…いい加減にしないと先生、あなたをも魅了させちゃうわよ」

「…っ」

その瞬間

「…!？」

「きゃっ!」

屋上から落ちた

もう駄目かと思った

助からない…

そう、この世とおさらば

さよならなら、皆…ああ

とつかあれ？何で落ちないの？

よく見たら、ネットのようなものがひいてある

するとルイン、上から

「美里っつ、よくやったー！」

「え、え？」

いつものルインだ…
すると魅了。戸惑う

「私の術が解けたですって！？」

「美里が突き落としてくれた事によって、奴との距離が出来た。魅了は近くに居ないと、魅了し続ける事が出来ないんだ！」

「なるほど〜！もう悪事は終わりよ、魅了さん」

「…今度は貴方を魅了させるわ」

「えっ…」

「美里！」

「やめてくださいっ！」

私が先生を突き飛ばした瞬間…

「…！力が…吸収されて」

あの時の光
白い光だ

「…封印…？…魅了、封印したんだよね、健太！」

「ああ、そつだよ！よくやった美里！」

「とりあえずここから降ろしてっ！怖いんだけど！」

「あ、ああ…今いく！」

こうして無事、魅了のオルフェリトは封印した保健室で寝ていた寮。放課後、私達がお見舞いに保健室へ雪付きだけどね

「寮、どう？具合は？」

「…大丈夫。もう治った」

「しかしまあ、美里に救われるとはな！」

「…ああ」

「寮君、無理しちゃダメだよ？がんばりすぎて倒れたとか、美里に聞いたから」

「お前、どんな説明したんだよ」

「え、あはは。ま、そんなとこかな！」

「そんなとこって…お前なあ」

家に帰って、ご飯を食べる時
ルインはいつも通りだったけど、寮の様子がおかしいのを感じていた
思いつめた顔でね。凄く、近づくだけでも重々しい感じがした

続く

第5話「男子虜！魅了のオルフェリト」（後書き）

まあこんな感じで、羽倉先生が…もとい、魅了のオルフェリトがキ
スしたわけです。それでは次回へ〜続く！

第6話「石化のオルフェリト、見参」(前書き)

少しグロい表現があるかもしれないです
なので、少しでもグロテスクが混じってたら無理です！という方は
ごめんなさい。

第6話「石化のオルフェイト、見参」

今日は久々の休み

最近、オルフェイトに襲われてばっかで疲れたよ

オルフェイト…か

その存在、周りに迷惑がられているのかな

そんな事考えていると、ルインが

「ねえ、美里！今日どっか行かない？」

「どっか…って？」

「まあ、あれだよ。最近オルフェイトに出会ってばかりなんだ。息抜きにね」

「息抜き、かあ。いいよ！寮は？」

「それが、寮…二人で行って来いってさ」

「…そうなんだ。…でもなんで？」

「魅了と出会った日からおかしいよね。…そっか、魅了にキスされそうになったからだ！」

「あんだねえ。人が困ってるところ、どこまでもおかしくしよつと…」

「俺なんかされたのにな、気にしてねーけど」

「いや、気にしろよ!」

寮、本当にどうしたのかなあ

そう言う事で、出かける事にしました

「美里、行きたい場所ある?」

「特にないんだよなあ、これが…」

「んー、そこ等辺ぶらりとしようか」

「そうだね…それしかやる事ないし」

しばらく歩いていると、不良に絡まれてる男が居た

「おい、テメエ。有り金全部よこしやがれ!」

「さもないと、痛い目遭うぞ」

「おうおう、まさか所持金0ってわけじゃあ…」

「黙れ、ゲス共」

「んだとこらあ!」

「俺からかつ上げしようとするから、こんな目に遭うんだ。石になつて後悔しな」

「ぬあつ！な、何だ！？足がうごかね…」

「ぼ、ボスウ！大変だ、ボスがどんどん石に！」

「ぐ、くそ、くそっ！ぐあああああ！

「…ルイン、あれ」

「男が石に…まさか、石化のオルフェリト！」

「…どうする？」

「俺だけじゃ美里を守りきる自信ないよ。…それに今日は息抜きだ、今日くらい戦いはやりたくない」

「…ルイン」

私はかすかに感じた

石化のオルフェリトが、こっちを見て笑っていた事

家に帰って私の部屋へ入った時の出来事だった

寮がない。…それに、まるで戦った跡みたい

「美里、これ」

「紙？…手紙かな」

『崩壊、封印のオルフェリトへ。魔術師君は芸術作品としていただくよ。やっぱ、魔術師は大した事ないねー。オルフェリト様に逆らうからいけないんだっての。お前等もそう思わねえ？返してほしけりゃ、オルフェリト専用倉庫へどうぞ。崩壊君ならわかるよね？』

石化のオルフェリトより』

「オルフェリト、専用倉庫って？」

「…その名の通り、オルフェリト達が家…もしくは、倉庫として使ってるんだ」

「家にもなるの？」

「オルフェリトは、例として寮。魔術師に嫌われ続けている。…だから、帰る場所がないんだよ。俺は美里のおかげで住まわしてもらってるけど、昔はあそこで暮らしてたんだ」

「へえ…。…寮、一人で戦ったんだね石化と」

「寮から聞いたとは思っけど、石化はあらゆる物を石にする事が出来る。大変厄介で、石化状態になったら最後。奴を封印するまで元に戻らない。美里に賭ける」

「…うん」

こうして、案内されながら辿り着いた倉庫

倉庫と言われているが、結構綺麗な場所だった
まさに、ホームレスにはもってこいの

あ、ごめんなさい。そう言う事言っちゃいけないよね

石化の家へ向かい、扉を開いた。

すると、石化は椅子から立ち上がって一言

「よう、崩壊と封印。来たんだね」

「寮…っ！」

私は慌てて駆け寄ろうとした
だけ

「おっと、それ以上近づくな！さもないと…彼の命、保障しねーぜ
？」

石化した寮の上に、吊り上げられた大きなハンマー

これが壊れたら、寮は…死んじやう
私は大人しくする

そしてルインが叫ぶ

「石化、お前はいつも根性腐ってる」

「あらあら、崩壊君に言われたらおしまいだな。…ちなみに俺の名はデイト」

「崩壊君って名前、気に食わないな。…俺はルイン」

「そ。んじゃ〜ルイン、さっそくだが俺等のとこに戻ってこいよ。術が封印されていても構わない。封印を殺せば戻ってくるんだから」

「デイト、それはお断りだな。お前みたいな奴、あまり好かない」

「あらまあ、同じオルフェリトなのにねえ」

「ねえ、ルイン。…こいつって」

「…今まで幾度も、魔術師を石に変えて、ぶっ壊すのを快感としたふざけた野郎」

「でも、代価として…」

「うん、奴は体が重くなる。でもね、オルフェリトの症状を治してくれる薬があるんだ」

「え？」

「それさえ手に入れば、体は術を使う正常な体に戻るから…何度でも技を繰り出す事が可能」

「…そんな物が…」

デイトはナイフを持って、石化した寮の首に近づける

「破壊最高！君達だってオルフェリトだ。魔術師を消したいと願って当然だろ！」

「る、ルイン…どうすれば」

「…あの状態じゃ助けようにも助けられないね。逃げる？」

「でも！」

「ククツ、ルインは正しい！それとも…君達も壊されたい？」

「美里、普通に戦っても奴に勝てないよ」

「…諦めない、私は諦めないから！」

「美里…っ！」

「…勇気あるね、封印さん！石になあれ！俺の芸術作品！」

「…寮…っ、今助けるから！」

「なっ」

私は、デイトを通り越して寮を優先的に救い出そうとした
だけだ

「…バカだねえ。…石化した人間なんて、軽々持ち上げられるわけ

ないでしょう！」

そして上からハンマーが降ってきた

「……！」

「ハハハ、終わりだ封印、魔術師！」

「美里っ！」

大きな風が、私達を吹き飛ばした

ハンマーは落ち、大きな地響きがした

…ハンマーが落ちた場所はもちろん、へこんでいた

「あ、ありがとう…ルイン」

「美里の勇気に負けた。それだけだよ」

「魔術を使うとは小癪な！」

「デイト。崩壊の力、受けてみよ」

「え…、でもルイン！」

「封印されたんじゃないのか？アハハ」

そして、何やら薬を出す

「…、俺をなめちゃ困るね」

「エクスパイパー…だと？」

え、エクスパイパー？何それ

「ルイン、それ…」

「これぞ、体を正常に戻す薬「エクスパイパー」。封印されたとしても、飲めば一時的に復活するよ」

それを一気に飲み干し…

「解放！」

「あ、ぐ…っ崩壊は相手が悪すぎるぜ！」

「死ね、デイト」

周りの壁が破壊し、鞭状態となりデイトを襲う

「くそ、どうにかして奴に近づければ…」

更にデイトの下、床が崩れる

「うああっ！」

そしてトドメ、鞭状態になった壁は奴の首を絞め始める

「…っ、こんな事で俺は…くじけねえぜ」

その鞭を破壊。そして

「ルイン、捕まえたぞ！」

徐々に石化していくルイン
奴もニヤリと笑っていた…

だが

「っ！」

後ろには気が付かなかったか
後ろの床が、棘に変形しディートの心臓を突き刺す

「…崩壊…てめ…っ、俺は…」

「美里、今だ！」

奴が死んだ後封印を解いても石化は直らない
私はとつさに、触れた

あの時の白い光がまた、放出された

「…美里」

「ん？」

「ごめんね、怖がらせちゃって。奴の死体なんて見たくないよね」

「ううん、私…ルインのおかげで助かったよ。感謝してる」

「…あはは」

その後の事…なんだけど

私が、トイレの前を横切って自分の部屋へ行く時

弱音が聞こえた

…所詮、俺等普通の魔術師とオルフェリトは違うんだ

ってね

続く

第6話「石化のオルフェリト、見参」(後書き)

本当に少しグロい場所でしたねえ

ほんの少しっ！

ま、こんな感じでやっていきます。次回第7話へ！続く！

第7話「家出？魔術師とオルフェリト」（前書き）

少し気持ち悪い表現があったりなかったり。

まあこれくらいなら大丈夫だとは思いますがねえ

あ、最初のほんの少し。部分に気持ち悪い表現？があります。多分普通に読んでたら気付かないだろうけど…

第7話「家出？魔術師とオルフェリト」

石化を封印した後の出来事

誰にも聞かれなくなかったのが、トイレですっと泣いてた

魔術師とオルフェリト…

それは一生掛けても釣りあわないものなのか

寮の気持ち…今ならわかる気がする

助けられてばかりだと、申し訳立たないし…

自分が無力だって思うととても辛い

石化事件があった翌日から、寮は食事も取らなくなった

深夜12時を超えると、いつも泣いてる。時々トイレの中で戻してる

…助けたい。寮を助けたい。

けれど、今の私じゃ何も出来ない

それほどに、魔術師にとってオルフェリトというのは最悪な奴なの
だろうか

寮の声を聞いてると、胸が苦しい

ある日の事だった

寮が久々に外へ出ようとしているのを見た

あの日以来、ずっと学校も休んでいたし

私は思わず聞いてみた

「…寮、どこ…行くの？」

「…ちよつと、用事あって」

「そうなんだ、いつてらっしやい」

そう言つて無言にドアを閉めた。

さすがに母さんも心配して、私に聞く

「寮君、何だか元気ないけど…ここ最近ご飯も食べないし。大丈夫？」

「う、うん！も…もう元気なんじゃないかな」

「そつ？…なら、いいんだけど。美里も、気を遣つてあげてね」

「え、あ…うん」

そういえば、あの日からルインも寮に話かけてないっけ
ルインも…気を遣っているのかな

ルインは私に声をかけてきた

「美里。寮の事なんだけど」

「…？」

「オルフェリトと過ごした魔術師は、大抵あんなにまで元気がなくなる。もう、一緒に暮らし続けるのは無理だよ」

「…」

「もしかすると、オルフェリトに刃向かって殺されるかもしれない」

「えっ」

「よくある話だよ。…魔術師がオルフェリトに刃向かう。一人でね…。そしてほとんどは、殺傷のオルフェリトに殺されているんだ」

「殺傷…あの一撃死を得意とする？」

「うん。…奴がこの町にいなきゃいいけど、もしいたら…寮は」

「…だ、大丈夫。寮の事…だよ、私を守るって言い張ったんだし…最後まで、約束守ってもらわなきゃ」

「…ごめんね美里、暗い話を持ちかけて。でも、殺傷がこの町に滞在していたら寮は死ぬ。それだけ」

「…ううん、ありがと。…」

そんな会話をし、寮が帰ってくると信じたのが最後。

寮は家へ帰ってこなかった。

私は寮を探しに行く決意をした

だがルインは当然反対。

殺傷のオルフェリトが出現したら、今度こそ全滅くらうかももしれない……と

それでも私は……寮を探しに行くんだ

その一言。ルインも仕方なく付いてきてくれる事になった

崩壊は全オルフェリトの中でも、トップに立つ能力者

ただ、霊魂だけには勝つ自信がないだとか

殺傷と霊魂と増減がグルになる可能性は非常に高いらしい

……もし、グルになったら……私達の力じゃ確実に

「美里、寮が居そうな場所把握できる？……俺わかんない」

「んー……寮が行く場所……」

思い当たらない

寮と出かけた事ないんだもん

私は落ち着いて考えてみた

「……そうだ……屋上だよ」

「へ？」

「学校の屋上！あそこ、前二人で休憩時間に行ったんだ。オルフェリトが襲ってこなかったから、ゆっくりできたよ。そしたら寮、こ

「こは落ち着くよって」

「よし、行ってみよう」

「でも…学校休みだよ、どうやって？」

「美里。俺は魔術師だよ？」

「…？」

「…ワープ魔法なら使えるよ。あまり遠くへは無理だけど、学校の屋上くらいならなんとか」

「お願いっ！」

「…目を閉じて。俺から離れるなよ」

「…うん」

心地よい風が吹く

そして目を開けた時にはもう学校の屋上だった

「…寮」

「ビンゴ。あとは美里、まかせたよ。俺がつかつに言つと大変な事になるからね」

「うん…がんばる」

「美里…、ルイン。来てたのか」

「え、あ…あの」

「追いかけて、来たんだな」

「じめん…」

「…いいよな、オルフェリトの身分ってのは」

「…」

「あの時、正直びびったよ。…崩壊が魔術も使わず石化を軽々殺す所」

「違う。そんな風に言わないで…」

「たかが魔術師…か。いや、まったくその通りだよ。平凡な能力」

「寮…っ！何で…」

「さすがオルフェリト。人を躊躇いなく殺す事が出来る」

「やめて…」

「オルフェリトは死を認めず、自分の犯した過ちを否定する」

「やめてよ…」

「だからオルフェリトってのは大ッ嫌いなんだよ！俺等が何かしたつてのか…俺等魔術師がオルフェリトに何か問題でも起こしたって

のかよ！」

「嫌…っ！」

私はつい…聞きたくない事を聞かされたから、寮の頬を思いっきり叩いた

だって、ルインはそういう人じゃないもん…

「…俺等だって…普通の人間として。一人の人として生き続けてるんだ。それを軽々殺すなんて…俺等だって死はこええんだよ！」

「…ごめんね、寮」

私は優しく、寮を包むように抱く

「…魔術師だって、化け物じゃないよね。一人の人間なんだよね…。私、寮と出会ってからずっと今まで…寮を化け物としか見ていなかったのかもしれない」

「…」

「…寮がうちに来てから。寮はかけがえの無い私の家族として受け入れたんだよ。ルインも、今は立派な私の家族…。私はあなた達が来てくれて嬉しい」

「美里…俺」

「だから安心してよ。寮だって、私を守るって約束したじゃない！…破ったら、私泣くかもよ？」

「ああ、忘れもしないよ…あの日」

「…ずっと苦しむ寮を見て…私も胸が痛いほど苦しかった。心ではずっと泣いてたんだよ」

「ごめんな…。俺は…っ、俺は…、オルフェリトに救われる事を第一に嫌いとしてきたんだ。それが…今こういう形で…苦しませて」

「私は、寮とルイン…それに、お母さんや雪。…皆が居てくれるだけで嬉しいんだから」

「…っ、自分で…、自分が凄く情けねえっ…うっ、うっっ…くそ…野郎っ」

「…寮」

寮は、ずっと苦しかったんだよ。

だから、あんな形で別れを告げようとしたんだよね？

…でも、私達がこれからは一緒だから

一緒、だから

その後ずっと泣いていた寮

余程辛い事がないと、これ程にまで泣けないものなんだと私は思った

今まで辛かったね、寮…

続く

第8話「殺傷、来る」(前書き)

途中、猫を酷く言ってしまうシーンがあります。
それで気分悪くしちゃう人はすみません、ごめんなさい。

第8話「殺傷、来る」

…あの日があつて以来、寮もすっかり元気を取り戻したみたい
私も本当に安心したよ

いつものように、マンガを読みながらゴロゴロしている私
ほとんどが、皆自由行動なのだ

時々あくびをしながら寝る事も多々…

しばらくして、ルインがなにやら持ってきた

「美里ー。見て〜」

「何?」

ダンボールの中に入った子猫

「どこから持ってきたの?うちは母さんが猫飼っちゃダメって言う
から…」

「えー、でもお母様はOKしてくれたよ?」

「はあ!?!?というか、本当にそのお母様ってのやめて。恥ずかしい
…」

「問題は〜、寮なんだよねー」

「え?」

そして、ルインは語りだす

そう、さつき猫を見せに行ったときの出来事

「寮、見て〜」

美里と同じように、普通に見せるルイン。

「何だ？」

戸惑いなく、見る寮。すると

「…！こっ、これは猫じゃないか！」

「そうだけど？」

「すつすまん、猫は苦手なんだ。ほんと、ほんとだから…」

「可愛いじゃん！ほれほれー」

「近づけるな！猫を見ただけで鳥肌が立つ！蕁麻疹でそう！」

「大げさな。可愛いじゃないか、ねー子猫ちゃん」

「ミヤ〜」

「うわあああつ！猫の鳴き声聞いただけでゾツとする！ああ、気持ち悪い…じゃ、そう言う事で…」

「あゝ、寮ーっ!…もう」

「ミヤ？」

という訳らしいです

「美里、猫飼いたい!」

「だめ、食費もかかるし…」

「えー、そこ等辺からかつ上げすれば」

「だめです!石化…、デート?から変な事学ばない!」

「むー」

すると寮。慌しく

「美里、ルイン!」

「どしたの、寮?」

「あ、寮。はい」

「ミヤ」

「うおおっ!ね、猫を近づけるな!それ以上、あー、ダメ!ほん
とにー!」

「…づるさいなあもつ」

「ルイン、テメエな！」

「はいはいはい、寮落ち着いて！。どうしたの？」

「美里…お前はやっぱり大人だ。うん」

「…」

「そう、こんな事やってる暇ないんだ…」

そう言うと、紙切れ一枚。何やらポスター？張り紙？

「…見てみ。この町に殺傷のオルフェリトが滞在している」

それは、男三人が一人の人を踏んづけて笑っている写真だった
とはいっても、一番右の男は表情薄い…

私が聞き返す

「これが、殺傷？」

するとルイン

「うん、真ん中の踏んづけてる男が殺傷だよ。一番左は増減。一番
右は霊魂だ」

「やっぱりグルだったのね、あの三人」

「…そうだね。これからどうする？寮」

「…そうだな…。ゆっくり作戦を考えたい所だが…殺傷による、一般人被害が凄い。それに…魔術師にも被害が及んでいるそうだ」

「やっぱりねー、殺傷君乱暴だし」

その場の雰囲気andraげようとするか、ルイン。殺傷の悪口を言いながらへらへらしている

「人目につく行動を起しているからなあ。…奴は、一般人や魔術師にこう言っているらしい。封印はどこだ。と…」

「それ…私を完璧」

「ああ、狙ってるね。一般人はまったく意味がわからず、「え？」と聞き返すんだが…結果殺される」

「…！私のせいで…皆が。…殺傷を早く止めなきゃ」

「でも、殺傷は強敵だよ？俺は殺傷より霊魂が大嫌いだけどねえ」

「ミャー」

「そうかそうか、猫ちゃんも霊魂嫌いか」

「たまたま鳴いただけでしょ…。…寮も寮だよ」

「ル、ル、ル…、ルイン！そんな気持ち悪い動物…！」

「寮、酷いよー！」

「あ、すまん…い、言い過ぎたかも」

「ミャ〜ウツ！フーツ！」

猫は、寮の肩に飛び乗る。…すると寮、動かなくなつて一言

「す、すまん…猫は一生掛けても好きになれないみたい…だ」

そしてその場に倒れこんだ

「あゝあ」

「あーあじゃないでしょー寮を怖がらせてどうすんのよー！」

「まったく、殺傷が来るつてのに寮はお昼寝！暢気！」

「あんたが悪いんでしょー！」

そして寮はむくつと起き上がり、物凄い怖い人相で

「猫、俺と勝負しやがれ…今こそ猫は消えるべし」

「こら、寮！猫相手に魔術使つな〜っ！」

「寮、猫相手に魔術…なんか子供みたい〜」

「だあ、お前等は黙って見てやがれ！消える猫ーっ！」

猫の回りには炎の壁が。さらに後ろには寮が待ち構えている
猫は物凄く震えている

さすがに猫が可哀想と思ってきた…

「あ、寮！猫より殺傷はどうするのさ！」

ルインが話を戻そうと、声をかけるも…

「殺傷？そんな奴後で醜い姿に変えてやらあ。それより猫だ、猫は
人類に物凄い影響を及ぼす」

「…大げさな」

「やめてあげてよ！猫ちゃん物凄く怖がつてるじゃない！」

「美里…、そこをどけ！猫という存在は人類に悪影響を及ぼすのだ
！世界が許しても俺が許さん！」

「…、寮。ほら、よく見ると可愛いよ？猫」

「うわああああっ！こっ、殺される、猫に殺される、呪い殺され
るうううっ！」

「寮！…もっ」

「でしょ〜？寮の苦手な物は猫なんだ。死より猫が怖いんだ。きつ
と」

「そ、そんなわけないでしょ」

「ありや重症だねえ」

「…ルインも気を遣ってあげてね」

「ぷ、察って意外に小さい人…」

すると階段から母さんが上がってきた

「皆、楽しそうねえ」

「た、楽しくありませんよ母君。彼等が俺を虐めるんです」

「えー？虐めてないよ〜」

「勝手に猫で怯えてる寮も寮でしょ…はあ」

「ふふ、あまり寮君をからかっちゃだめでしょう？あ、これお届け物だつて」

「え？うん。誰からかなー」

その箱の異変に気付いた寮

「美里、開けるな！」

「へ？」

その箱を思いっきり外へぶんなげる。
衝撃で箱は開き、煙がもくもくと上がる

電線の上に止まっていたカラスがヨボヨボとなり地面へポトリ

「あ、あれなによ！ルイン、寮！」

寮は思いつめた顔で

「増減の仕業か。…年齢増加ガスを入れてやがる」

「それって、玉手箱みたいなの？」

「ま、そう言う事だな…。増減は醜い姿で死に逝く人を見て、爆笑するような奴だ」

「…そうなんだ」

ルインが、窓を見つめ叫ぶ

「…！寮、美里！もう近くまで来てるよ…殺傷と増減と靈魂だ…」

「くそつ、もう来たのか…」

「…殺傷、増減、靈魂かあ」

「寮、美里。ワープ魔法使うよ」

「三人も同時に運べるのか？」

「わからないけど、やってみる」

「…ルイン、がんばって」

「…それじゃ、行くよ」

スウツと、またあの時の心地よい風が吹く
だけど、その風は急に温かい風へと変わる

目を開けると目の前に

「よお、封印。会いたかつたぜ。まさに作戦通り…、崩壊がワープ
移動するのは見えてたぜ」

「…、彼等をワープ移動させないようにするの苦労したんですけど
」

「よくがんばった、うんがんばった！」

上から、殺傷・霊魂・増減

この結果に、さすがのルインもびっくり

「い、い、ごめん！寮、美里」

「…いや。こうなる事は多少わかってた…相手が霊魂だもんな」

「霊魂って、ワープ阻止も出来るの？」

「ああ、霊を使った術さ…」

奴等の作戦にまんまと引つかかってしまった私達

逃げたい気持ちは山々。でも逃げられないのが現実

このまま、私達は地獄へ落とされる運命…なの？

続く

第9話「絶望」(前書き)

この回はグロイ表現あります。
苦手だという方はすみません。よい方はどうぞ

第9話「絶望」

「よお、封印。会いたかったぜ」

「…、彼等をワープ移動させないようにするの苦労したんですけど
」

「よくがんばった、うんがんばった！」

現れた三人。上から殺傷・霊魂・増減

やらなきゃやられる。それだけ…

殺傷を仕留めなきゃ、皆が殺され続けていく…

私は、胸の奥で感じる感情を出さないようにした

すると殺傷。なめた口調で私達をからかい始めた

「封印がそんなひ弱でいいのかよ？ふ、まあどうせほとんど崩壊が
手助けしたんだろうけどよ。そこらの魔術師じゃ俺等は殺せない。
ザコいのばっかだぜ！」

こっちも対抗すべく

「寮、美里は守るよ。…解放！」

例の、エクスパイパーを飲み干し解放。

「おう、ルインに負けない程度がんばるぜ」

寮も、魔術を唱え始める

「面白いじゃん。解放！」

「…、僕も参加しなきゃだめ？」

「靈魂は相変わらず戦闘派じゃないねえ！奴等を醜い姿に変えてやる…、解放！」

「…、めんどくさいな…。…解放」

相手もやる気満々で挑む

…靈魂以外は

寮はまず一に、殺傷を狙い始める

「うおっ！俺を狙うなんて勇氣あるねえ」

「要は当たらなきゃいいんだ。一発当てれば死んでくれるんだからな！」

「ふうん…完璧なめられちゃって」

一方ルインは靈魂と増減を狙い続けている

「ひゃっほい！スリル満点〜！」

「…、崩壊ってー、解放すると異様に口数減りますよね」

「別にそんな事今どうでもいいっつーの」

「…逃げ足だけは速い」

「うるさい！崩壊は近づかなきゃぶつ殺せるだろ！？おい、靈魂」

「…、やらなきゃだめですか」

「ったりめーだろ！うおっ！」

崩壊の力で地面が捻じ曲がり、増減を地面へ埋め込む

「あー、増減さ〜ん。生き埋めになっちゃいましたね、一応仇取り
ます。呪われそうだし」

そう言うと、靈魂は立ち止まる

「死ね、靈魂！」

「死ぬのはどちら様ですかねー」

地面が割れ、靈魂を増減と同じよう埋め込もうとした…
「ただど奴の方が上手だった
術が途中で止まる」

「…、だから死ぬのはどちら様と、言っただでしょう」

「あっ…、くっ、うっ…うあっ」

急に首を押さえ始めるルイン

そのままルインは地面に倒れこんだ
私が急いで駆けつけるも、すでに息は無かった

「崩壊、御臨終様ですー」

人の死を喜ぶオルフェリト達…それが私は許せなかった

そうだ、寮は！と思い探す

…寮の方はまだ苦戦していたようだ…
すると霊魂

「いつまでやってるんですか、殺傷ー」

「すつすまん、こいつちょこまかと！」

「仕方ないですねー、…魔術師、死んでください」

「…！」

「寮っ！」

だが時はすでに遅し

「っ、くそ…霊魂…ッ」

「ジーワジーワ、ジーワジーワ。楽しいですねー」

「ああ、ああ！俺は一気に殺してえんだ！なんか腹立つ」

「まったく、せつかなお人ですね殺傷はー」

「うああっ!」

「…っ」

こんな大事な時に

私は力一つも使えないのか

そんな事考えているうちに、見る見る寮がやられていく

「っ、うつ、霊魂…ッ、うあああっ!」

「死にさらえーですくアハハー」

「やめて…もう、やめっ、やめて…」

「大丈夫ですよー、彼の骨はバキバキに折ってあげますー」

「うつわ、もういいかよ霊魂、俺マジ苛立ってきた。暴れたい」

「…仕方ないですねー、お遊びはここまでー。トドメは殺傷」

「…っ、はあっ、はあっ…くっ」

寮がうつ伏せになって、息を切らす
そして上から

「じゃーん。殺傷様登場!死ね!」

生々しい音が聞こえた
肉に深く食い込む刃

寮からはドクドクと…
血が流れ出ていた

血生臭い

もう立つてもいられないよ
どうすれば、いいの？私は、どうすれば…

「へへ、封印のお嬢さん。大人しく我等に付いて来てくださいな」

「嫌…こない、で…人、殺し…っ、嫌！」

「そんな拒否らないでくれよ。第一、石化だって、崩壊に殺されたんだ。こいつも犯罪者だぜ」

「それは…」

「だから、大人しくしろよ。封印」

殺傷は後ろに回りこみ、猿轡をかませた

声をあげたかった、でもあげられなかった
怖い、物凄く…怖い

すると、向こう側から誰かが来た
すらっとした、パツと見暗い雰囲気を持つ男性だ。
殺傷はすぐに反応した

「誰だテメエ」

すると靈魂、驚いた表情で

「殺傷、…、蘇生です」

「おおおう、蘇生さんがなんのようかねえ？」

蘇生は無言で、殺傷の手を叩き私を助ける

「っ、テメー何しやがる！貴様も地獄行きだ！」

蘇生は笑いながらただ、靈魂と殺傷を見下すような目で見る

蘇生は、一体何の用事で？

何で私を助けた…の？

続く

第10話「蘇生の条件」(前書き)

この回も引き続きグロイのがあります。

無理、無理!という方はすみません。

…もしかすると、見る人によっては9話よりグロいかもです…

第10話「蘇生の条件」

「誰だ、テメエ」

「殺傷、…、蘇生です」

私を助けてくれた蘇生のオルフェリト…

一体何を企んでいるのかわからないが、殺傷は命令を下す

「靈魂、奴を殺せ！」

「わかりましたー、僕もこいつ気に食いませんしー」

「…邪魔」

蘇生のやつと喋った一言。それが「邪魔」だったのには少し啞然何かを叩くように手をやる

「…、彼…靈が見えるんですね、靈術は無理ですー」

「何いつ!?!?」

「でも安心してくださいー、僕にはまだ…魂を吸う事が出来ますから」

勢いよく突っ込んだ靈魂…しかし

「そんなに死にたい？」

「またも余裕ぶつた口ぶりで言う
靈魂が蘇生に近づいた瞬間だった」

「…、ぐはっ！」

ゾンビが地面から湧き上がって、靈魂の肩を噛んだ

「…っ、やめて、くださいー…、痛い、嫌いなんですよ、ねえ…
っ」

「…君、僕をバカにしてないかい？」

「バカ、になんて…してませんー…、うっ…うあああああっ！」

「これが彼等の味わった痛み、苦しみ。死という絶望を知れ！」

「僕の、僕の魂が！なくなる、気がしますーっ、僕は、まだ死にたく
ありません…せーん」

「どこまでもその口調を直さないんだね、さすが靈魂」

すると殺傷も勢いよく背後から狙ってきた

しかし…

「背後から狙うなんて卑怯ですよ」

「っ、ぐっ…」

ゾンビ2体が殺傷を取り押さえ、腕を噛んでいる

「気持ち、わりーぞ。この悪趣味が！」

「悪趣味じゃありません。僕の可愛い可愛い、子分です」

「ぐ…、ああっ…、やめろ、やめろっ…死にたくない、死にたく…っ！」

「自分の死を認めなさい。オルフェリトの名を腐らす気ですかあなた方」

「皆そう思っただけだろ！死は誰でも…」

「それだから、魔術師達に嫌われちゃうんですよ。ま、この術も原因ですが」

「蘇生、さっきから偉そうに酷いですー、何だか、僕、頭にきちやいますー」

「…もうお話は済んだ？」

「待て、待て、蘇生、待ってくれええっ！」

「待ってください、よー…、まだ、心の準備がー…なんちゃってー…」

「待たないよ。…死に心の準備なんて物はないんだから。…散れ！」
各ゾンビが、首を噛み付く

二人は声も出ないまま倒れていった

「…僕の可愛い子分。…彼等を胃の中に収めていいよ。食い荒らし
ちやえ」

あの殺傷と靈魂、二人も同時に倒すなんて…
彼は一体

蘇生つて、最強…？

「…大丈夫ですか、お嬢さん？」

「え、あ…ありがとう」

私は殺傷と靈魂の方向をチラツと見る
ゾンビが、二人を食い荒らしている
大量の血が流れ出ている
耐えられない…

「あ、そうだ。お嬢さん、二人の封印まだでしょ？これ、二人の身
につけていたアクセサリーです」

「ペンダント…、ピアス」

「僕の推測が正しければ、一番このアクセサリーに能力が詰まっ
ているんです。ささ、どうぞ」

「…」

恐る恐る触る。

すると、封印の白い光が出た

「これで封印完了です!…」

ルインと寮の方へ向かい、二人の脈などを調べ始めた

「…やはり、長引かせすぎたか。崩壊はともかく、魔術師君は助かるかもしれないかったんだけど」

「それじゃあ…」

「二人は死んだよ」

「そんなっ、そんなの…って」

「…じゃ、僕は行くね」

「…あなた、蘇生なんですよね」

「そうだけど」

「蘇生さん、お願いします、お願いです!」

「…悪いけど、見ず知らずの人を助けても、見ず知らずの人は蘇生させないんだ」

「お願い…、お願いします、お願いです!」

私は彼に訴える。

土下座をしたり、彼に縋りついたりして

「お願い、お願いです…。私にとって、彼等は…彼等は。掛け替えの無い存在なの…」

「…じゃあ、僕の条件に3つ答えてくれますか？」

「何でも、何でもします！」

「んじゃ〜1つめ。牛モモ肉と、カツを買ってきて」

「…へ…?」

「お使いだよ。お願いねー」

「え、あ…はい」

言われるがままに私は購入

「おお、お見事〜。ほれ、そんなマズイ食事じゃ嫌だったろ〜。牛モモ肉だよー、子分達〜」

そして、ゾンビは牛モモ肉にたかる

「それじゃ2つめ。ゾンビちゃんのお散歩タイム」

「!?!?」

「僕の子分に、首輪つけるから…散歩してきてね。あ、これがコースね」

「いや、普通ゾンビはないでしょ…、変な目で見られ…」

「大丈夫！なんとかなるさー。僕いつも変人って目で見られてるし」

「…」

言われるがままに、三匹を散歩へ連れ出す

ゾンビの方は、育て方がいいのかかなり大人しかった。

周りの方は、「え？何アレー、気持ち悪い！」とか

「あれって、いつも暗い男の子が連れてるよね。気味悪いわー」
などなど

「ただいま…」

「おかえり〜！僕の子分も喜んでるよ。それじゃ〜3つめ。最後だよ」

「…」

「そんな顔しないでー。今度はまともだよ」

「何ですか？」

「今まで、君はいくつ封印した？」

「えっと、8つあるから…ルイン含めて…6つ！」

「あれ、7つじゃあ？」

「実は…増減がまだ生き埋め状態に」

「…そう。少し待ってて…、僕の子分。その穴、掘り起こして」
ゾンビ達が掘り起こすと、増減が倒れていた

「これ、封印していいよ」

「え、あ…はい」

言われるがままに封印

「よし。これで7つだね…、子分達、増減食っちゃえ」

「あ、あの一…」

「うん、それで頼みたい事なんだけどね。僕が今から別の森へワー
プさせる」

「はい…」

「そこで、その封印した7つの力を利用し…目的地を目指して欲しい。そこに、白い一輪の花がある。それを摘んで来て」

「…7つの、力？私いままでそんな物放出した事ないですよ？」

「大丈夫、封印さんなら出来るから」

「いや、そう言われても」

「…自分を、信じて。…この森から生きて帰れたら…君は神に君臨
できる一歩手前さ」

「…君臨…、私が？そついえば寮がそんな事…言つてたよつな」

「待つたは無し。行くよ」

「はい。お願いします」

「…無事でね、封印さん。誰の力も借りず…がんばれ」

心地よい風が吹く

そして、目の前に広がったのは森

この頂上に…、一輪の花が？

私は歩き始めた

寮、ルイン…待っててね。今助けるから

続く

第11話「死の森！一輪の花を目指して」

薄暗い森の中

私は歩き続けた

「…、そういえば…、蘇生さんから食料もらってないや…」

このままじゃ確実に飢死してしまう。

どうしよう…、何かを狩って食べなきゃダメ？

すると、都合よくバーを発見した

もちろん、私は怪しく思う

バーの扉が開き、立っている猫が出てきた

「おや、お客さんかな？」

「え、私はただ！」

「遠慮しないでいいです。どうぞどうぞ」

押されたのでつつい入ってしまった

そこには、カウンターに立った犬まで居る。

現実ではありえない事に、私は頭が混乱

「…お入りください」

犬がそう言っていると、私は席に付く

「…何にいたしましょう」

「違うんです、私はただ…あの。…すみません、失礼します」

私は慌てて逃げようとした…けど

「逃がさないニヤ」

「逃がしませんよ？お客様。ワンッ」

「…！」

二人が武器を用意し始める
私は戸惑った

「お客様は我が胃袋に入る運命なのニヤ〜！」

「自分の死を認めなさいワンッ！」

「きゃあああっ！」

その瞬間、何かが発動した

「かつ、体が…動かない…ワン」

「目だ、奴の目を見たらいけないニヤア！」

…もしかして、魅了…？

「…ごめんなさい。私は行きますね」

そう言っつて何もせず帰ろうとすると

「ニヤアア！机がこつち向かってくるニヤ！」

「…！店内の柱が折れたぞ！非難、非難…」

私は犬達の声に気付き、見せの方向を振り向く
しかし、バーはグチャグチャに潰れていた

…これが、崩壊の力…なんだ

「いやあ、危なかったね封印さん」

「…！？蘇生！」

「ちゃあ〜」

「ちゃあ、じゃないよ。何でここに？」

「これは君を見守るためだ。実際には居ないけど、バーチャルとでも言っつかな」

「…今の、お店は」

「うん、あそこに入る旅人は全部奴等の餌食になるんだ」

「じゃあ、私はやっぱり…あの人達を殺したの？」

「それが現実。やらなきゃ、彼等に食い殺されてたよ」

「…そうだよね」

「立ち止まってる暇はないよ。彼等を救いたいんだろ？」

「うん…」

「こうして私はまた一歩一歩、歩き出した」

「…そういえば蘇生」

「ん？」

「私、さっきから変な物見えるんだけど」

「変な物って？」

「…、なんだろう。幽霊…的な」

「それは靈魂の能力だよ。気にしなくておっけー、僕も見えるし」

「そんな事言われても…」

「それはそうと。お魚とか取って食べないと死んじゃうぞー」

「え、でも私魚取った事ないし」

「この尖った木で取ればいいじゃない」

「そんな物で取れるわけないでしょ！」

「いいから、いいから。物は試し！」

「…無駄だと思うけど」

私は川へ辿り着いた。言われるがままに魚を木で刺す…が

「あつ、おいしい…かすった」

「ふふ、封印した能力をちゃんとわかってあげなきゃダメでしょー、封印さん」

「えっ」

鱗だけ剥げた、魚。

だが浮かんできた…、死んだ状態で

「もしかして…殺傷」

「うん。少しでも傷つけれる物があれば、殺傷は発動する。だから押しピンもありだよー」

「…そうなんだ」

私は改めて、殺傷の怖さをしる

「とりあえずその魚取って、焼こうよ。火は自分で起こしてね」

「…マッチがあるから大丈夫」

「おお、準備いいな封印さん！」

「犬さんには悪いけど、取ってきたの…、生き残るためよ」

「うん、その考えは間違いじゃない」

するとまたも、効果が発動した
魚が2匹に増えたのだ

「増減、ね。火が消えないように石、集めなきゃ」

もう大分慣れてきた

石集めは石化を使えばいいのよね

でも…何だか心の底では悲しい

何故、だろう

こうして、私は寝た

次の日

私は橋を渡り、歩き続ける

すると、向こう側から変な生物が私を狙って現れる

「近づかないで。近づいたら…あなた達死ぬよ」

昔の私じゃあ、まったく出るはずの無い言葉

今ではこんな一人前の言葉が出るようになったんだ

私はどうしても、そんな自分が許せなかった

こんな軽がる…殺す事が出来るなんて

私も徐々に殺人鬼化としているのかもしれない
そう思うと怖かった

蘇生は、それを軽々口に出す

「ひゅー、封印さん。慣れてきたって感じだねえ」

「…うん」

途中、崖があった。向こう岸に渡るには、木を倒して橋を掛けるしかない

私は崩壊の力で木を三本倒し、足を滑らせて落ちないように二本の木は石化させ手すりを立てた

これが、本当に私の力なのだろうか

ううん、みんなの力を吸収してここまで強くなったんだ

「封印さん、やっぱり神にしてはこれくらい楽勝じゃない？」

「…蘇生。…私、自分で自分が怖い」

「…そうだね。封印のオルフェリトとして生まれてくる人は、何人もそんな事言ってた」

「…でも、今は悩んでられないのよね」

「うん…」

そしていろんな罫をくぐり辿り着いた。

頂上、一輪の…花

「よくやったね、封印さん」

「…」

そして一輪の花を摘み取り、ワープの魔方陣が起動した

元の場所へ帰ってきた

すると蘇生

「おめでとう、封印さん！これで貴方も立派な…神様だよ」

「…」

「さ、約束通り彼等を蘇生させてあげるけど」

「まだ、何か用？」

「魔術師君の本当の名、知りたい？」

あの時のルインと同じ事言ってる…
知りたいよ、でも…

寮の全てを見るのが怖い

ルインも言ってた。…名を知ると、嫌いになるかも…と

「どうなの、封印さん。彼を蘇生させたら二度と見れないよ？…だ
つて、彼とどんな関係になろうと…教えたくない秘密は秘密だもん
ね」

「…私」

知りたい

「教えて、ください」

「うん、わかった。彼の名前はねえ」

私は思わず息を呑んだ

「無いんだ」

その一言に…私は驚いた

「彼の名前はね、無いんだよ」

「…、え…？」

「…春伊寮なんて名前ももちろん偽名だけど、本当の名前すら無いんだよ」

どういっ、事…？

寮に名前が無い…なんて

そんな事って…

続く

第12話「名の無き種族」

「彼の名前はね、無いんだよ」

「…、え…?」

寮の名前が無い…そんな事って

「彼は名の無い種族。その姿は、大きい猫だと証言者は言っている」

「…」

「スピードは風のごとく、能力は崩壊並」

「世界を、潰せる力…ってことだよね」

「そう。その名の無い種族に語った一人の若者」

「…」

「その人はこう言った」

『人間になりたいか、名の無い種族達よ。ならば争え、戦え。生き残った一人が、人間となれる』

「名の無き種族は人間になりたいといつも願っていた。…皆から化け物扱いされるから。怖がられるから」

「それで、その男の人の言う事に耳を傾けたのね」

「うん。生き残った最後の一匹、それが人間となれた。その男は、彼に名前をつけたよ、人間界で生きる名を。…それが」

「春伊、寮…」

「そう言うこと。怖かっただろうにね、種族同士の争い。子猫のよ
うな、赤ちゃんですら巻き込まれて死んでいった」

「…もしかしたら」

寮が猫嫌いだったのも、トラウマがそれだったから…といえ
ば
合っ

「名の無き種族…。大人しい種族だったからね、いきなり争えっ
て
言われて…きつと大混乱だったと思うよ」

「…、大人しい種族…か。そうよね、怖かった…よね」

私は思い出した。あの時の力強い寮の言葉

「…俺等だって…普通の人間として。一人の人として生き続けて
る
んだ。それを軽々殺すなんて…俺等だって死はこええんだよ！」

その言葉を思い出すと、今一度胸が苦しくなる

「種族を滅亡させた一匹の猫は：人間にしてみらい、春伊寮という名で旅立っていった。彼が生まれて、まだ5ヶ月ちよいって所かな」

「…」

「5ヶ月の間で彼は必死に、人間になろうと勉強し続けた。少しでも人間に近づきたいってね」

蘇生の言葉は胸の奥にズキズキと突き刺さる

私は今、寮にどうしてあげるべきなのだろうか

「…そして。…今の彼がある。たった5ヶ月の知識で。封印さんに近づき、オルフェリトを倒そうとした。君を守って、世界を守りた
いって思った」

「…私、寮の事何もわかって…なかったのね」

「それは、全オルフェリトに広まったよ。君は、5ヶ月しか生きていない彼に…どう接する？」

「…」

「それは君の運命を変える。…じゃ、蘇生させるね」

そして寮とルインに術を掛けた

「これでよし。…ねえ、封印さん」

「え、あ…何？」

「僕を封印して」

「…え？」

自ら封印を頼む蘇生…

「…僕の能力、もう必要ないよ。だから…ほら」

蘇生は私の手を取り、封印を発動させた

その瞬間、何だかよくわからない…物凄い力を手に入れた気がした

「…、うっ…」

「…！ルイン！」

「…。美里…、あれっ…蘇生？…殺傷と増加と霊魂がない…」

「じゃ、僕は失礼するよ。じゃあね」

「…寮…」

「…！寮っ！美里、これは一体…」

「だっ、大丈夫だよ。蘇生さんがちゃんと…」

「違うんだ！っ、蘇生なんか掛けても寮の場合は…！」

「え？」

「…崩壊。それはどういう意味です？」

「君はちゃんと聞いてなかったの！？そのっ」

「名の無き種族の話は彼女にしました。ご遠慮なさらず続けて」

「…、名の無き種族は人間じゃない。君の術は人間のみしか発動しない。元々人間じゃない寮に掛けても、奴を呼び覚ますだけだ！」

「…！そうだったんですね。ああ、あの時ちょっとウトウトしてまして」

「くっ…なんてこと…」

黒い霧が寮を包む

そして、大きな猫へと変形していったではないか

「…ルイン、蘇生さん。あれ…」

「名の無き種族だよ。美里、蘇生から聞いたでしょ？寮に名前は無い。…化け物なんだよ」

「あちゃあ、えらい事になりました」

「蘇生。君が責任を」

「僕は嫌ですよ」

そして隣から、男が現れた
寮とそっくりの。いや…同じ、顔…

「…君達が、起こしたの」

「お前は…」

ルインが聞き返すと、男は名乗った

「ルヴィリット・デュプレ・イレイド」

「な、名前長い」

「美里さん、そう感じるのも仕方ないでしょう。ふふ」

「俺は君たちの名前も知ってるぞ。封印の、凧灘美里。蘇生の、ルカ・イリユーゼ。崩壊の、ルイン・ド・フレイアス」

「あらあ、個人情報はいけませんよルヴィさん。美里さんにだって教えた事ないんですからー」

「何故、俺達の名を？」

「俺は何でも知っている。石化のディート・ルアン。増減のルーベ・イルマス。殺傷のグライト・インダース。靈魂のステイウス・アルマ・リュド。魅了のビュティ・ルイサ」

オルフェリトの名を、全部語って見せた男

そして、別の話に口を開く

「彼は種族の中でも性格がクールなタイプだった。…もちろん、活発なものもある。そんなのが勝ち残っていたらどうなっていたらうか…ふふ、想像しただけでも面白いぞ」

まったく自分の世界に入り込んでしまっている。

そこで、蘇生…、ルカさん…？が、ルヴィに言う

「貴方、もし僕が寮さんに蘇生をかけなかったらどうするつもりだったのです？」

「どうだろ。その時はその時かな…、封印も全て揃ったわけだし」

「え、美里全部揃ったの!？」

「うっうん。…蘇生さんが、自分の能力を封印して…って頼んできて」

「…ルカ、ルイン。その子を渡せ。彼女は神に君臨するのだ」

「嫌ですね。僕、彼女に惚れちゃいました」

「俺もルカに同意」

「ただそれだけの理由？」

「…彼女は寮君が必死に守ろうとした掛け替えの無い人だから。僕もその意思継ぎます」

「俺が美里を殺そうとしたのに。…美里は死を拒絶する俺に優しく手を差し伸べてくれた。だから守るって決めたんだ。恩返しがい」

「ルイン、ルカさん…」

「…わかった。…じゃあここで死ね！行くのだ、名の無き種族…」

「…」

「どうした、というのだ。今のお前はもう人間でないのだぞ！さあ、行け！」

「…、ミャーオッ」

「否定すると言っつのか、愚か者！」

「ふふ、あはははっ、あははっ」

ルカさんが突然笑い出した

「何がおかしいというのだ！」

「いやあね、貴方が人間に触れさせてしまった事で、人間の気持ちかわかつちゃったんですよ。この5ヶ月で」

「…人間の気持ち？所詮化け物は化け物ではないか」

「…そうですね。でも貴方こそ、人の気持ちを知りえない無知な野郎じゃないです?」

続いてルインもルカに賛同

「そつだ。所詮高見の見物をして、利用してきた。無知な野郎」

「崩壊、蘇生。神である俺に逆らうつもりか? 化け物が情を持ってどうするといふのだ!」

私はつい、口出ししてしまった

「化け物、化け物つて…何よ」

「その通り。奴は化け物にすぎないのだ」

「寮は…、寮は一人の人間としてこの世を生きたの! 化け物なんかじゃない…立派な人なんだから!」

「あつはははは! 何を言うかと思えば封印よ。それは愚かと言う物だぞ」

「寮は人間だよ、化け物なんかじゃないんだよ!」

「ふふ、ははっ…神になる物がそんな甘い言葉出してんじゃない!」

「…!」

私は咄嗟に、技を繰り出した

崩壊の術

地面は棘に変わり、ルヴィイを刺した

だが奴は顔色一つ変えず、術で私を突き飛ばした

「美里！」

「美里さんっ！…貴方は一体何者だ！神の名を名乗って…」

「俺？俺は封印のオルフェリト」

「なっ…」

「ふ、封印のオルフェリトは美里だけだ！この世に二人も同じオルフェリトが生きているはずなんて…」

「それが、崩壊。生きてるんだよ。俺は封印だ…、美里も封印だ」

奴は宣言した

この世に各オルフェリトは、一人しか居ない物。
しかし、封印は二人居るのだと

続く

第13話「神君臨。封印のオルフェルト」

「それが、生きてるんだよ。俺は封印だ…、美里も封印だ」

封印が…二人

「だからこい。我等と神になろうではないか…」

「ちよつと待つてください。僕等無視でやめていただけます？神と言っなら…僕を倒してください」

「ちよつ、蘇生！それはマズイって…、全能力集めた美里でも敵わない相手！」

「…これで僕が負けたら…美里さんは渡します。それが一番…、彼女にとっても世界にとってもよい物だと、僕は考える」

「う…、うん。そう、だよね」

「面白い。神の力、どれほどの物かを味わえ」

「行きなさい、僕の子分達！」

地面から這い上がるゾンビ達
それに対抗

「あはは、そんな小細工俺には効かんよ！」

ゾンビの足元が崩れ落ちる

「ふふ、地獄を知れ」

ルカさんは、軽く舌打ちした後、ゾンビを増やし続ける

「蘇生は所詮。動く死体を使って攻撃させるだけ！蘇生は攻撃面で、まったく役に立たない！」

次々とゾンビ達を石化させるルヴィ

間違いない。いろんなオルフェイトの術を使えるという事は…

彼も封印だ

「ほら、どうしたよ蘇生！」

「っ！くそっ…、魅了か…っ」

「蘇生だつて人間さ。死ぬんだよ、刺されたら！」

「…読みが、あまいです」

後ろのゾンビが必死にルヴィを取り押さえる

「邪魔だ！くそっ…蘇生、なめた真似」

「…攻撃面では確かに役立ちませんが…、数で取り押さえるのも悪くないでしょ？」

「ふふ、数で勝負…か。力があれば、数万匹いよつが物の数ではない」

纏わり付くゾンビ達を崩壊の術で薙ぎ払うと

「蘇生よ、跪け…神の名の下に」

「…！」

ルカさんの肩を掴み、気を集中し始める

「蘇生…っ！くそ…俺は、無力っ」

ルインも手出しする…が

「神の前では…何をやっても無力な物だよ」

「うわぁっ！」

風魔法は見事に跳ね返された

「あっ…、くっ、う…。僕の、魂など吸って…どっする気、ですか」

「蘇生。魂は一部となりて、結合するのだ」

「…そう、ですか…」

その諦めた一言

奴は急に手を離す

「…っ、何をする…封印」

私の手は奴を掴んで、石化の術を唱えていた

「美里、さん…」

「やめる…神を殺す気が！くそっ…」

「私、人を殺したりする神様なんていららない！」

「考えがあまりいぞ封印」

奴から電流が流れ、つい手を離す

「俺はオルフェリトでありながら魔術師なのだぞ。魔力の持たないオルフェリトなど、怖くないわ」

「…私が、あなたに付いていけば…ルインとルカさんに手出ししません？」

「ああもちろんだよ。雑魚共を相手にしている暇は無いんだ…俺はずっと、君を待っていた」

「わかりました」

「おっおい、美里…っ！」

「美里さん…それが貴方の決めた事…なのですね」

「はい。ルカさん、ルイン…ごめんね、がんばってくれたのに…」
んな形でしか」

「いえ。僕は貴方の決めた事に口出しする権利などないですからね」

「…納得、出来ないよ…。やっぱり納得できねえよ！こんな形で別れるなんて…。俺は、俺は無力だ…美里、一人守れず…っ」

「…崩壊君。泣かないで下さい、美里さんが心配しますよ」

泣きながらルカさんに抱かれるルイン
声をあげず、静かに涙を流していた

「ごめんね、ルイン。…ルカさんも、ありがとう」

「ええ、さようならは辛いですけど。短い間、楽しかったです」

「…さ、行きましようか」

「ふふ、俺はこの日をどれだけ待ったか。二人で新世界を…創ろう」

だが、私と奴の間に、名の無き…、ううん。寮が割り込んできた

「…邪魔をする気か？このデブ猫が！」

「寮…大丈夫だよ。私は、私のままだから…心配、しないで」

「…、ミャーッ」

「…寮も心配してくれて、ありがとう」

「ふふ、あはははは。神降臨。この世界は生まれ変わる！皆神を称え、美しい世の中となる」

「…、どこに行くの？」

「神の座さ。そこに座れるのは神のみ。神の宮殿」

「…。ワープしてください」

「ああ、神の宮殿まで道は遠い。魔方陣を用意してあるさ」

その魔方陣の上へ私は立つ

「…そこ、二人のオルフェリト。世界の行く末、しかと見ておくがいい」

「美里さん。神様になっても、美里さんは美里さんですよ。さようなら」

「うん、ルカさんも…、お元気で。きつといい世の中にするわ」

「…、美里…早くどっか行けよ…。俺はもう、お前なんか…お前…
なんか」

「…ごめんね、ルイン。今まで楽しかったよ…、さようなら」

「…」

私は神の宮殿へ足を運んだ

魔方陣でワープした先は、すでに宮殿の中

神の座へ一歩、また一歩と近づく

そして…そこへ座った

「うむ、見事だ…新しい神、美里…貴殿は我々の神となり、世界を変えてくれる」

複雑な、気分だった

そう、とても複雑な

続く

第14話「神の名の下に」(前書き)

いろいろ恋愛要素あるかもですーそんだけ(あ

第14話「神の名の下に」

「うむ、見事だ…新しい神、美里…貴殿は我々の神となり、世界を変えてくれる」

複雑な、気分だった

そう、とても複雑な

なんだかよくわからないけど

心の奥底、モヤモヤした気持ち

その気持ちに小さい針で突かれたようなチクチクした痛み

今全てを思い返してみると

私は寮に出会うまで、普通の女の子として高校に通っていたのよね

寮が来てから、いっぱい、いっぱい命狙われたけど

それでもいつも傍に、寮とルインが居てくれた

これが当たり前の生活になりつつあった

いきなり、寮ってば……。自分を魔術師って名乗ったっけ
あの時は本当にびっくりしたなあ

ルインが来てから、賑やかになった家。

いつも通りの食事が、何だか美味しく感じた

ルインが伊雅健太の名で登校してきた日は本当に驚いた。
しかも、いきなり彼女だっけって言うんだよ。女の子に何だか敵視され
てたなあ

羽倉先生が魅了だったのはすっごく驚いた
あの時は本当にピンチだったよ

石化が現れた日。寮の様子がおかしかったっけ、気を遣ってルイン
も私を外へ連れ出したなあ

石化と勝負した時、私は寮の気持ちを知った気がした……

寮が食事を取らなくなった日。私はすっごく心配したのよね
でも、また寮が笑ってくれてよかったと私は思った

殺傷……。あいつは本当に怖かった
皆、全滅させられた

……。蘇生……。ルカさんが来てくれた。
殺傷から免れた。私は寮達を蘇生してもらったために、花を摘みにい
ったのよね

花摘みは険しい道程を進んでいかなきゃならなかった
……。だけど、封印の力……。化け物みたいな力により、私は案外軽くクリ

ア出来た

蘇生さんがルイン達を蘇生してくれた。名の無き種族の話も聞いた
そこへ、もう一人の封印が来た

そして、現在に至る

私は神になったんだ

普通の高校生が、神になったんだ

ううん、私は普通じゃない

化け物みたいなこの力、今にでも捨ててしまいたかった

「…どうした美里。顔色悪いではないか」

「え、あ…何でもないわ」

「神になったのだ。もっと喜べ」

「…うん」

「…っ、何だ？」

「…!?」

霊、一匹

ルヴィの首を掴んで締め上げた

もちろん、ルヴィも霊を薙ぎ払う

「…封印、何で神様になるなら言ってくれないんですかー、手助けしたのにー」

「靈魂さん!?!」

「靈魂さんって名、やめてくださいー。僕はステイウス。ステイウス・アルマ・リユド」

「何で、ルカさんに殺されたんじゃない?」

「…蘇生、していただきましたー。気に食わなかったけどー」

「他は?」

「殺傷と増減は蘇生の都合で蘇生してませんー。そして石化も地獄のままー、魅了は誘っておきましたー」

「…ステイウスさん。もしかして…」

「…神の名を語る悪党をー、退治しに来ましたー。ルヴィリットさんー」

「悪党、だと?ふふ…だがもう遅い。いくら援軍が来た所で!」

「あーら、それはどうかしら」

「魅了さん!」

「封印ちゃん…いえ、美里さん。私はビュティよ…覚えて頂戴」

パンツ！と、宮殿の扉が開いた
そこには寮の上に乗ったルインとルカさん

「…勝手だけど、やっぱり美里は…神なんてにあわねえよ」

「それ、ルインどういふ事よ…」

「ふふ、美里さん。僕はやっぱり貴方に惚れちゃってます」

「もう、ルカさん！？」

「ミャ〜ッ」

「でも、ありがとう…。寮、皆…」

「…神殺し。そう言う事で把握していいか？」

「貴方は今、オルフェリト達を敵に回しているのですよ」

ルカさんは容赦なくルヴィに言う

「そんなの。…俺が全部潰してやる」

「お前は…、絆の強さと言つ奴を知らないんだ」

「じゃあ崩壊。お前は何を知っているとこのだ？情など受けんぞ」

「それは自分で見つけ出してくださいねー、僕ー、蘇生と崩壊の事
見直しましたー」

「うふふ、美里さん待っててね！今悪の芽、摘むわ」

「…どうしても退かないのか」

「…行くわよ、解放」

「…解放っ！」「」

皆は、秘薬「エクスパイパー」を飲み干し、術を解放する
周りは凄い殺気に包まれた

「ほーら、神様。私の目を見なさい！魅了の力、思い知れ！」

「僕の子分達、奴を取り押さえるのです…、魅了の方に向けて！」

「崩壊の力…解き放ってあげるよ」

「僕のー、可愛い霊達も一緒〜うふふ〜」

「ぐっ、くそっ」

案外簡単に崩れ落ちてしまう神…
そこへルカさん

「何を躊躇している？貴方は神に君臨するのではなかったのか。これくらい、貴方なら簡単に…」

「…五月蠅い。…美里さえ神になれば…世界は」

「ルヴィさん、やっぱり私」

「…大丈夫だよ、俺の可愛い美里。俺はいつでも…」

「あららん？それって、愛の告白ってー奴じゃないわよねえ？」

「そうなんですかー、僕、知りませんでしたー。おめでとさんー」

「あのねえ、魅了、靈魂。君達は少し黙ってなさい？」

「…ルヴィ。殺す、絶対殺す」

「…！ぐあぁっ！」

地面に叩きつけられるルヴィ。

「あららん、伊雅君嫉妬？可愛いわねえ」

「魅了。その名で彼を呼ばないであげてください。今は崩壊のオルフェリト、ルインなのですよ」

「うふふ、そうだったわねえ」

「嫉妬って、なんですかー？」

「靈魂、いくらなんでも無知すぎます」

「嫉妬はねえ、焼きもちよー」

「焼きもち？食べられるんですねー」

「…靈魂」

「ん、崩壊君どうかしましたー？」

「決して嫉妬とか、そういうのはないからな」

「焼きもちの事ですね、冬に食べると美味しいですよー」

「すみませんルインさん、靈魂と会話しても話しになりませんよ」

…いつもの、皆だ

まったくもって緊張感が無い彼等…

少し不思議でたまらない

「殺す、殺すっ！」

「る、ルインさん落ち着いて！」

「だゝあっ！これが落ち着いていられるかーっ！」

ルインを必死に止めるルカさん。

さらにそれをあおる靈魂と魅了。

「ひゅーひゅー、これぞ愛の力っ！」

「がんばってくださいーい、その勢いでガンガンやっちゃってくださいー
いー」

いくらなんでも酷すぎると思っけど…

とりあえず私も口出ししてみた

「る、ルイン…。それ以上やっちゃったらルヴィの身はどうでもいんだけど、仮にも寮の顔なんだから…」

「知らん！だいたいっ、あいつの事も、気に入わねえええ！」

「いい加減にしてください！」

「いやあ、もてる女は辛いわね風灘さん！」

「ひゅー。崩壊さん、そういうのが好みなんですかー」

「バツカ、俺はただ…！」

「もう何が何だか…だわ」

でも…

やっぱり皆でこうして話してるのが一番楽しい

「…、ふふ。オルフェリトに囲まれて嬉しそうだな美里よ」

「ルヴィさん。貴方は最後まで…」

「…昔、俺もある高校生の女に出会った」

「…」

「そいつは、俺と暮らし始めるうちに…気が狂い始めてな。そいつ

は一世代前の殺傷に殺されたよ…」

「えっ…。…それ、ルインが言ってたケースと同じ…」

「悔やみきれない思いで俺は必死に彼女の仇を討ち、全能力を集め神となった。彼女を失ってから俺は、情という物を持たなくなった」

「ルヴィさん」

「だが美里。お前に何かを教わった気がする…。彼女は今の俺をどう思っているのだろうか」

そして立ち上がり、寮の所へ。

「…信じる、己を最後まで。…再び彼が死す時…我は目覚めるとしよう。それまで…しばしの安息だ」

徐々にルヴィは黒い霧へと変形していく
そして私に残した最後の言葉

「…また会える日を楽しみにしているぞ…美里。ふふ、それまで彼に見守ってもらおうとしよう」

黒い霧はやがて、人型になった

「…寮…」

「美里…、ただいま」

「…おかえり、寮」

その姿、声…この感覚。
間違いなく寮だった…

とても温かい気持ちになる…

「べつ、別に俺はお前がああ猫状態でよかったんだからな！乗り心地いいし！」

「の、乗り心地って…」

「もう、ルインさん素直じゃないなあ。僕なんか素直ですよ！」

「うっせー蘇生！」

「あつ、またオルフェルト名で言ったー！ルカって呼んで下さい！」

「お帰りなさい、春伊君！私待ってたわ、貴方が帰ってくるの！」

「あんまり魅了の言葉気にしてないので」

「酷いわねえ！」

「僕ー、疲れてしまいましたー。…ところでー、美里さん？」

「え、何…？ええと…」

「ステイウスです。貴方は、神様になるんですかー？」

「あ、それ私も聞きたいわあ！」

その場に居る全員が私に注目を向ける
もちろん、喧嘩しているルカさんも、ルインも

「…神なんて、馬鹿馬鹿しい。皆自由に生きればいいじゃない…私はそう思っただけど、だめかな？」

「僕ー、すっごく賛成ですー」

「美里さん、強くなりました！」

「凧灘さんってー、よくわからないところがあるけど…ま、私もそれでいいわよ」

「うんっ、美里が言うなら断然おっけーでしょ、拒否権なあし！」

「皆…っ。…寮は、どう思うっ？」

「美里が言うんだ。そうしたほうがきつと…いいのかもしれない」

「ありがとう」

「美里」

「え…？」

その瞬間だった

寮は私の前髪を上げ、額にキスをする

もちろん皆呆然と立ち尽くしている状態だった

そのまま、小声でありがとうと呟き魔方陣へ向かう

私も…すっごく恥ずかしかった

「えっ、あっあの、寮!？」

「寮の奴、やっぱー気にくわねえ、あー気にくわねえ!」

「ルインさん落ち着いて…!」

「まあっ!寮君可愛い挨拶じゃないの!」

「ひゅー、もてますねー!」

「うっ、うっ、うっ、うるさあいつ!」

私達は無事に…神の宮殿から去った

続く

エピソード（前書き）

恋愛要素ありません。

むしろ、よい方はトへへ

エピソード

その後、季節は巡って春になりました

私は高校3年生

ルインと寮は相変わらず、私の家に滞在中

「ううゝ…むにゃむにゃ」

「おい、美里。学校遅れるぞ？」

「もう少し…もう少し…」

「入学式に遅れる奴も珍しいな。新一年に大笑いされるぞ？じゃ、先行くわ」

「美里も早く来いよなーっ！俺待ってるぞー！」

「ルイン、五月蠅い」

「寮に言われたくねえやい！」

チュンチュン…と小鳥の音がする

「うー…ねむっ」

「…!?!?寮、ルイン!?!」

「美里ちゃん、寮君とルイン君ならもうとっくに出ました」

「あーんもう!いつてきまあす!」

「美里ちゃん、ご飯は!」

「いらないわよ!」

三年生になってもコレな私

ほんと、最近自分で自分が情けないわ

めんどくさい式。

こうして、その後掃除をするのだった。学校掃除は初めて
な二人

周りの女子はサボりつつ、寮とルインに話をかける

なんだかうんざり…

掃除が終わり、ホームルームに移るわけなんだが…

「どうも、担任をさせていただきます！羽倉美千子って言うの。皆さん是非覚えてね」

「…寮、ルイン。まさかとは思っていい？この後…」

「ああ。まさかと思っていいぞ」

「まさか…だよねえ」

この話に、雪はクエスチョンマーク。
そしてやはりまさかでした

「転入生紹介しまあゝす、どうぞぞ！」

「こんにちは、川谷琉佳と言います。お見知りおきを」

「どもー、長谷田涼夜です。よろしくー」

まさかのまさかでした。

上から、ルカさん。ステイウスさん

つかステイウスさんに涼夜はないでしょ、うん絶対…

「お二人と仲良くしてあげてね！さ、何か一言あるかしら？」

「んー…どうでしょうね？ま、言う事と言えば僕は美里さんの彼女です」

はあ！？

「僕はねー、りよ…」

すると寮。またも立ち上がる

「先生！俺トイレ行っていいですか！」

「いいけど、早めに帰ってくるのよ？」

「行くぞ伊雅、凧灘。その二人も黙って来い！」

こうして、ルインが転入してきた時同様連れて行かれる

「お前等バカか」

「えー？どうでしょうねえ」

「おいルカ！川谷って名前にあわねえよ！」

「えー？伊雅もどうかと思っけど…」

「…ステイウスさん、ルカさん。来ちゃったのね」

「来ちゃいました」

「来ちゃったー」

「もっ…」

「そっいえば美里さんー、羽倉先生から聞いたんですけどー」

「何？」

「付き合っつて何ですかー」

「そんな事聞かないでよ、あんたどこまで無知！？」

「なんかねー、好きな人が出来たら言う言葉なんですってー」

「まあ…そうよね」

「寮さんー。僕とー…」

「やめる気色悪い！その言葉は好きな女が出来た時に取って置くだ！」

「えー、でも僕好きな女の子いないですし、だから寮にしようかなーって」

「…まるで意味わかってないし」

私はとりあえずつつこむ。無知にも程がある

「だぁあっ！付いてくるな、あまり長引かせると先生に迷惑だ…行くぞ」

「まっってくださいー、寮ー。僕とーお付き合い…」

「ふざけるなぁぁあ！」

二人は猛ダツシュで走りこむ

なんだか、寮が可愛そうだ

「んじゃ、俺も教室行くわ。早くこいよな」

ルインもその場を去る

「…行こうか、ルカさん」

「待ってください」

「…?」

「放課後、屋上で待ってます。必ず来てくださいね」

「え、うん…」

何で用があればすぐ屋上なのだろう

ま、いいんだけどね

そして放課後

私は寮達に、先帰るよう言っって屋上へ

「…ルカさん、待った?」

「いえ。僕も今来た所ですよ」

「どうしたの…?」

「…、美里さん」

「え、あつ…はい」

彼の真剣な表情につい、堅くなる

「…その、僕ね。貴方に会って本当によかったと思ってるんです。とても楽しい。とても温かい。そう、短い間に思いました」

「…」

「美里さん、僕とお付き合い…していただけないでしょうか」

「えっ…」

「すみません、いきなり。…必ず、貴方を守る。…僕は貴方の事が…大好きだ」

「…私」

「嫌…でしたよね。ははっ、僕は暗いし…ただ背が高いただけで優秀でもないし。顔も並で、寮さんやルインさんに比べたら…僕なんて」

「ルカさんは、私を守るって、私に嘘付いたり裏切ったりしない？幸せにしてくれる?」

「はっはい！人を…幸せに出来るのが、唯一僕の得意と…自分で思ってるので」

「…私でよければ。お願いします」

「…！本当ですか！？」

「うんっ、ルカさんは私も嫌いじゃないし、付き合ってみてそれからよー！」

「ありがとうございます！僕、もう気持ち舞い上がってます！」

「あははっ、素直だ〜」

「これ以上にならない幸せ！僕は、僕は…っ」

「いっいや、泣かれても困るんだけど！」

「見つとも無い所お見せしました。それでは…失礼します。あ、家まで送りますでしょうか？」

「え、いいよ…悪いし」

「安全に美里さんを家へ帰す！それも僕の使命です！」

「は、はあ…」

「行きますね…」

すると、下に魔方陣が描かれた

「ワープ魔方陣、発動！」

「ううして

家へ帰れた私なんだが

「ただいまー」

「お帰りー、なさいー」

「うわっ、ステイウスさん!?!」

「今ー、お母上とその他2名に料理お出ししたんですー。そしたら、絶賛でしたー」

「よ、よかったね。というか皆やめてよその言い方あ。…あ、ルカさんもどうぞー!あがってー」

「え、あ…はい、ありがとうございます…」

「あーら、新しいお友達?美里ちゃん、ステイウス君の作ったお料理、おいしいわ〜」

「うん、いけるいける。おかわりい!」

「…悔しいけど負けた」

食卓で、三人が食べている

試しに私達もそれをいただく

「ん、ステイウスって料理うまいんだ！」

「んー、靈魂のくせにいい」

「ルカピー酷い。僕だって料理くらいできますよー」

「でも、何で急に料理しようって?」

「それはーですねー」

するとルイン

「…寮、どんまい」

「…嫌だ…悪夢だ、夢で終わってくれ…でもうまい…」

私達が帰る前の出来事

「待つてくださいよー、寮さーん」

「寮。ステイウスどうすんの?」

「知らん」

「羽倉先生が言ってたんですけどー、料理が上手だと好きな人は振り向くって言ってたよー」

「あの魅了…くうう」

「ですからー、僕の料理食べて、精いっぱいつけてくださいー。もし僕の料理がおいしかったらー」

「…いいだろう。はは、お前なんかにもな飯など作れるか」

「また寮、安請け合い…。後悔しても知らないよー？」

「後悔などせん！あいつの料理はまともじゃなさそうだ、うん」

というわけで

「…寮、どんまい」

「…寮さん、どんまい」

「二人して同じ事言っても慰めにならんぞ」
するとルイン

「じゃ、寮、元気だしなよ」

続いて私

「じゃ、寮、いい婿？さんもらってよかったじゃない」

「じゃ、寮さん。幸せになってね」

「くう…：…なんたる屈辱」

「そういえば美里、ルカと何話してたの？」

ルインが興味津々に言う。

私は顔を赤くして、恥ずかしさを抑えた…が

「んー、僕ね、思い切って美里さんに告白したの。オーケーですって」

「んなっ」

その衝撃か、ルインが固まる

「お母様…っ、俺失恋したかもーっ！」

「はいはい、ルイン君。まさか美里にこんな彼氏が出るなんて、夢にも思わなかったわ」

「酷いよ母さん」

「うあああああっ、惨めだイジメだ…！ううっぐずっ、ぐすん」

「いやっそんなに泣かれても困るし！私が泣かしたみたい！」

「人は悔しい思いをする事で、また一步強くなれるんです。うん。君はまだ年齢低いんだから、お付き合いとが無理なわけです」

「蘇生……。蘇生きえろおおお！」

「え、ちょ、ルインさんやめ……」

1メートルかかれたハンマーを振り回すルイン
さすが崩壊……。力も凄いわ

「……はあ」

また私の家は騒がしくなった

あれ？そついえば寮は……？

「待つてくださーい、寮さーん。羽倉先生が言っていましたけど、好きな人に「私の愛を受け止めて」って言うそつですねー」

「やめろおおお！魅了、こいつに何吹き込んだんだ！来るなああああ！」

寮の、逃亡生活はこの後2週間に渡り続いたそうなの

完

エピソード（後書き）

皆さん、読んでいただきありがとうございました！

最後の方考えてる時、何だか書いてる自分まで寮の事が惨めに思えてきたんですよねえ…。

魔術師戦争はこれで終わったわけですが…、しかあし！（何）続編を書く予定です。その時はまた、よろしく願います！では、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2504h/>

魔術師戦争

2010年10月20日18時59分発行